

日本社会の「安全」の受け止め方の変化： 安全関連語における和語の役割

Historical changes in the perception of the word “ANZEN” in Japanese society;
WAGO’s role in safety-related terms

関西大学 社会安全学部

辛 島 恵美子

Faculty of Societal Safety Sciences,
Kansai University

Emiko KANOSHIMA

SUMMARY

Modern Japanese has been established through three major changes. The first stage of Japanese was developed without letters and is also called “WAGO”. The second stage began with the introduction of kanji into Japanese and struggled with the WAGO expression method. The third phase focused on the translation and creation of new words needed to accept modern science and technology civilizations. This paper focuses on WAGO safety-related terms and shows how their meaning has changed.

Key words

Safety, WAGO (和語), ANZEN (安全), perception, change

1. 研究の目的

本論は安全問題領域でよく使われる基礎語彙解釈の歴史の変遷に関する研究の第二報である。具体的には「安全」の言葉の背後にある和語の解釈の変化と特徴を明らかにし、現代的な「安全」解釈において、どのような役割があったのかを明らかにするものである。

「安全（アンゼン）」の言葉はその読み方からも推測できるように、漢語由来の言葉である。しかし外国人が編集発行した三冊の日本語辞書

（1603年、1830年、1867年〈織豊時代から江戸後期、江戸末期・明治維新前後〉発行）の「安全」の解説は漢字「安」の和訓である動詞「ヤスズル」の解説と対応するものであった（第一報参照^[24]）。しかし現代の国語辞典類（本論では広辞苑7版^[12]）では、少なくともその対応は無い。消えたのである。なぜ消えたのか、それが和語の受け止め方の変化に関心をもった動機である。

そのため和語の特徴とその解釈の変化を明らかにすることを通して、現代日本語「安全」の

受け止め方の特徴を明らかにすることを目指している。なお、本論では“和語”を“文字（漢字）導入前にすでに確立していた日本語”の意味で用いる。やまと言葉とも呼ばれる。また日本語は和語読みを和訓、訓読みとも呼ぶことから、本論でもその用語を用いる。

論文の構成は、第1章では研究の動機と目的、第2章で研究の方法を詳述する。研究方法として漢字の概念又は字源を比較分析の基点として利用し、その基点からのずれに着目して言葉の用い方の背後にある特徴を考察しようとするものである。第3章において「安全」の漢字「安」に置き換えて綴られることの多い和語「ヤスンズ、ヤスシ、ヤスラカ」等と、「全」に置き換えて綴られることの多い和語「マタシ」等の特徴とその起源について検討する。第4章で和語の特徴をとりまとめ、「安全」の言葉の受け止め方との関係について整理している。

2. 研究の方法

2.1 辞書の選定と特徴

専門分野では安全関連語の定義等を定める必要性もあるためであろう、国家規格 ISO/IEC の安全の定義をはじめとして各専門分野で「安全」をキーワードとする言葉の研究文献は多い。近年では「安全」よりその特徴が「リスク」に変わってきているが、本論も「安全」の言葉に注目している点で共通しているともいえるが、研究対象は専門分野や特定目的のための安全の定義類ではなく、日本社会の常識として語られるレベルの「安全」の受け止め方にある。

そのため、研究の直接の材料は一般的な国語辞典類、しかも本論ではとくに安全関連の和語に焦点があるため、古語辞典類が中心となる。

その代表的な辞書の一つに『時代別国語大辞典』（三省堂）がある。昭和17年暮れの編修作業開始時には上代・平安・鎌倉・室町・江戸・

近代の六班に分かれてスタートしたが、戦争を挟んで中断等もあり、結果として発刊は上代編（1967）^[1]と室町時代編（1985（1巻あ～お）・1989（2巻か～こ）・1994（3巻さ～ち）・2006（4巻つ～ふ）・2007（5巻へ～ん）^[2]のみとなった。

日本史分類の上代は飛鳥時代後期から奈良時代を指す場合が多く、上代語は七、八世紀中央貴族階級の言語を指すのが一般的である。当時の文献資料は、皇族・高級官吏・僧侶などと、それらの人々と交渉を持った下級官吏・写経生・舎人や史などの帰化人等の識字階級の手によって文字化され、残されたものである。

それに対して室町時代編はおよそ二百年続いた室町期に使われた語全体を対象として編纂したものである。その序によれば、室町時代は日本語の歴史においては古代から近代へ推移する過渡期に当たり、古代語の継承と近代語の生成発展という二面が交錯して複雑な様相を呈しつつ、次第に近代語の輪郭を現わすに至る時期にあたる。さらにその前後の時代とは違って外国資料、特にキリシタン資料が重要な役割を持つと指摘する。「当代の日本人自身の手になる自国語に関する記述が初歩的段階に止まっていたのに対して、織豊期に活躍したイエズス会士の残した語学書は、日本人の観察の及ばない面を補って余りある。それは、ヨーロッパ人の語学の水準に基づくものであり、布教上の必要から編まれた特殊な性格をもつものであっても、室町時代語を再構する上では不可欠の基礎資料となっている。」とも記す。

時代による言葉の受け止め方の変遷を明らかにしたい観点からは便利な辞書であるが、日葡辞書刊行以前となると、平安期と鎌倉期の文献が抜ける。そこを補うには、時代別編集されていない古語大辞典類や日本国語大辞典などに依存せざるを得ない。

現在、日本で最大規模の国語辞書は小学館日本国語大辞典^[3]である。1972年から5年間にわたり刊行され、全20巻、45万項目、75万用例という大型辞書である。これは1915年（大正4年）から18年にかけて刊行された上田万年・松井簡治共著『大日本国語辞典』（初版4巻、二十余万語）^[4]を引き継ぐ事業として展開された。それまでの多くの辞書とは異なり、膨大な資料に立ち返って、日本語をくまなく記録しようとの意図のもとに作業を展開し、日本文化の歴史をとらえ、日本民族のこころを伝えることを目指して編纂されたといわれている。具体的には1964年に国語学界を代表する学者を編集顧問に迎え（金田一京助、新村出、諸橋轍次、佐伯梅友、時枝誠記、西尾実、久松潜一、山岸徳平）、

200名以上の執筆者を動員して完成させた。なお、この辞書は第二版増補版が2000年に刊行され、さらに精選版も2006年に出版されている。少なくとも本論で扱う安全関連語に関する限り、2000年の増補版でも変化は無く、参考文献数の充実が特徴である。そのため特に三種類の区別が必要ではないとの判断から、文献番号は[3]で統一している。

表1は日本国語大辞典^[3]の見出し語「安全」の解説である。文献の充実具合から第二版を採用している。あらゆる時代の日本語彙の蒐集を基本とする方針からも「安全」がどの時代から使われていたか、おおまかな推測が可能な辞書でもある。しかし英語辞書にあるような文献上の初出を明示した書き方にはなっていない。

表1 日本国語大辞典（第二版増補版2000年）における「安全」

あん-ぜん【安全】（名）（古く、「あんせん」とも）	
解説	用例文献
①（形動ナリ・タリ）危険のないこと、平穏無事なこと。また、そのさま。	平家（13C前）3 医師問答「願はくは、子孫繁栄絶えずして〈略〉天下の安全を得しめ給へ」 太平記（14C後）21 法勝寺塔炎上事「四海の泰平を祈って、殊に百王の安全を得せしめん為に、白河院御建立有りし霊地也」 玉塵抄（1563）33「武王の無道の者を誅しめ武威を以て天下を安全にせられたほどに五穀も熟して豊年なぞ」 彝倫抄（1640）「いたづらに国の費（ツイエ）となる民を、自然（ジネン）にあらたむるやうにあるならば、国家富貴（コツカフウキ）安全（アンゼン）にして、儒風もいよいよおこるべし」 浄瑠璃・平家女姫島（1719）「忽障礙消へうせて御所の震動安全たり」 良人の自白（1904-06）〈木下尚江〉後23/2「貴方の安全な顔を見ることが出来て、こんなうれしいことは無いのです」 後漢書・夏恭伝「恭以恩信為衆所附、擁兵固守、独安全」
②（形動）傷ついたり、こわれたり、盗まれたりする心配がないこと。また、そのさま。	東大寺百合文書-観応3年（1352）4月5日小槻国治若狭太良庄地頭方代官職請文「悪党以下地下違乱出来之時、就内外、可廻庄家安全計略」 酒中日記（1902）〈国木田独步〉五月十五日「元来狭い家だから別に安全な隠し場所のあろうはずがない」
③（～する）心を落ち着かせること、気持ちを安らかにすること	*風曲集（1423頃）「万人の見聞も、眼はひとりと安全して、一調、二機、三声と歌いだすべし」
【語誌】(1) 漢籍に出典のある語で、センは漢音。中世まではアンセン・アンゼン両方があったが、「ロドリゲス日本大文典」や「日葡辞書」などに「Anxen（アンセン）」、「落葉集」に「安全あんせん」とあるのを見ると、中世末にはアンセンのほうが一般的であったと思われる。近世以後はアンゼンに変わり、近代以後「セン」の形は消滅した。(2) 「安全」と「無事」は現代語で意味が類似するが、「安全」には、なにか「外的な状況も完備していて、無理も生じなかった結果として、何ら心配もなく」というニュアンスがあるのに対して、「無事」には「いろいろと心配事もないではなかったが、結果的にその心配も無用となって」というニュアンスがある。	

2.2 「安」「全」概念を用いた分析方法

2.2.1 「安」「全」概念を用いた分析方法

リスクも含めた広義の安全問題関連語の定義に関する議論や論文の数は多く、特徴ある辞書類については辞書の研究論文もある。また特定の言葉に注目して解釈の歴史的変化をみるものもあるが、その多くは一般的な辞書だけを対象にすることはない。一般辞書の「安全」解釈を問題にした文献となると、キーワード検索結果からは「安全」「安心」を対象に明治期以降の辞書の語釈の変化を研究したものが一件であった^[25]。これは語釈をA（心理的要素で構成される群）とB（心理的要素を含むとも含まないとも判定できる群）に分類し、戦前と現在のABの割合の変化をみたものである。

本論は辞書に記されている解説の特徴を判断する道具として、漢字の概念（または字源）、本論では「安」「全」の概念を用いており、これを基点、現代の解説（本論では広辞苑7版^[12]）を終点とする尺度を設定し、それとの比較により、解説のもつその時代の姿勢や特徴を明らかにすることを目指している。

その目的は二つある。一つは過去の研究は将来の在り方に何らかの示唆を与えるものであるべきだとの考えからであり、「言葉の意味は変化する」との前提にたち、過去の解析が将来を見通す際のヒントやガイドになることを期待して批判的解析を目指している。

いま一つは分野横断的な問題を扱うことになる社会安全学の立場にとって役に立つ手法の開発である。多様な専門領域横断的課題を取り扱う現実の安全問題では、短期的に見れば誰かが得をし、誰かが損や我慢を強いられる行動を採択せざるを得ないことも多い。そのような場合に、損や我慢を強いられても声もだせない弱者や立場があることを見落とすことは何としても避けなければならない。短期的には不公平にな

らざるをえないとしても、長期的に見れば公平になるような配慮と見守りの立場こそが社会安全学の一つの役割と考えているからである。そうした役割がはたせなければ、安全問題の紛糾は社会の基本秩序の維持すら難しくすると懸念からである。それゆえに、参集している専門分野や立場に目を奪われず、集まっていない、集まれないでいる専門領域や立場の物事に気づく方法論が不可欠となるのである。欠けているものを探せる方法論の探究である。社会安全学の立場をたとえていえば、ジグゾーパズルのピースの位置決めを考える立場に似ているかもしれない。多様な専門分野や立場をピースに例えている。ゲームとしてのジグゾーパズルは完成図が最初に見えていて、ゲームスタートはそれをバラバラにして始めるのが一般的といえるだろうから、関係外のピースが混じり込むことはなく、また全ピースが揃っているのが特徴といえよう。しかし現実の安全問題の場合は、関係内か否かの判断も必要になるし、さらに厄介なのは全関係ピースが集まっているとの保証の無いところから始めざるを得ないことである。さらにもっと重大な問題は完成図のイメージを共有できる場合ばかりとは限らないことである。各ピースから見る全体の景色と、完成図からみえる景色とは違って当然であろう。しかし強く大きな発言力、行動力のあるピースなどピースに大小の差が大きい場合、そこに利害が絡まれば、全体像（完成図）がどんなものかを明らかにしなければ、議論は拡散して集束しないことになる。そうした混乱が予想されるからこそ、各ピースの特徴を捉えて、あるべき位置に置く方法の工夫が、まずは必要となるのである。本論の方法はそれを意識したものである。

本論では概念（字源・語源を含む）の研究ではないことから関連の諸概念は加納喜光『常用漢字イメージ辞典』中央公論新社（2011）^[9]の

コアイメージあるいは字源を概念として利用する。2.2.2~2.2.3にコアイメージと字源についてとりまとめているのは道具としての「安」と「全」の特徴を事前に明らかにしておくためである。本文中でコアイメージ（概念）や字源を取り上げている他の漢字も複数あるが、「安」「全」は基本であることから、2章で整理している。

2.2.2 「安」のコアイメージと字源的特徴

漢字「安」についての加納のコアイメージは「(上から下に押さえて) じっと落ち着く」である^[9]。ある場所にじっと落ち着くことを意味する古代漢語が*・anであり、この聴覚記号を視覚化したのが「安」であるという。「動きのある物を押さえて止めて、ある場所にじっとさせておく」が「*・an」のコアにあるイメージであり、「女+宀」により、女が家の中に腰を落ち着けて居る状況の図形をつくり、安らかに落ち着いている様子を暗示しているという。「安危」の熟語もあるが、「危」のコアイメージは「バランスを崩して傾く」であり、「安」の「(上から下に押さえて) じっと落ち着く」とはまさに対照的な不安定さを意味する言葉である。

具体的な動詞用法は、漢辞海^[23]によれば「① やすんずる・ヤスズ：㊦ 落ち着かせる 例：修己以安百姓 自己を修養して民衆を安定させる（論語 憲問），㊧ なだめる 例：在安民（政治の要は）民をなだめることにある（書 皋陶謨）㊨ 孝養をつくしてやすらかにする 例：老者安之 老人には孝養をつくしてやすらかにさせる（論 公冶長）㊩ 養生する。養う 例：衣食所安 衣食は養生するためのものである（左・莊 10）㊪ 置く。配置する 例：先安筆硯対溪山 まず筆と硯を置いてから溪山と対面した（陸游詩・東陽道中）」であり、形容的用法は「① やすい・ヤスシ。㊫ 気楽にのんびりしたさま。例：悠悠舒而安 悠々としてのんびりで気楽である（韓愈・詩・南山）名詞化は略、

① おだやか。平穏なさま。例：白日即安 昼間は穏やかである（王度・古鏡記）㊬ 無事であるさま。対語「危」。例：是以身安而国可保也 ゆえに身は無事で国家は維持できる（易 繫辭下）」である。

日本語的用法として「① 容易である。日本語の「やすし」には「たやすい」の意味もあることから、「安」の字を当てたもの。② 価格が低い。近世以降の用法」との指摘もある。

これらの解説全てに共通する表現なら“心身ともに穏やかにゆったりと落ち着き安定している様”になるだろう。これなら、「なだめる」も「孝養を積む」も「養生する」も含みうる。しかしそれをさらに共通するギリギリの特徴に絞れば「じっと落ち着く」となろう。漢字「安」を用いるところには最低限この特徴があるということになり、本論ではこの特徴を「安」の概念的特徴と捉えることにする。

2.2.3 「全」のコアイメージと字源的特徴

漢字「全」のコアイメージは「欠け目なくそろろう」であり、元の漢字は「入+玉」で、象嵌などの工作の際、びっしりと玉をはめ込む場面を設定した図形である。この意匠によって、欠けた所がなく、すべてにわたって揃っていることを意味する古代漢語*dziuanを表記する^[9]。そこで本論では「全」の概念的特徴を「欠け目なくそろっていること」とする。

なお、「全」としばしば混同される漢字に「完」がある。これも和訓はマツタク、マツトウスル、マタシである。しかしコアイメージは「丸く行き渡る」である。「元（丸いイメージ）+宀」よりなる「完」は家の周囲にまるく垣をめぐらす場面を設定した図形である。この意匠によって、全体に行き渡って欠けたところがないことを意味する古代漢語の*fuanを表記する。全体は「○（円形）」のイメージで捉えられ、「欠け目がない」というイメージも生じる。『孟子』に「城郭

不完=城郭完(マタ)からず(城郭が完全ではない)」とあり、全体に行き渡ってそろっている意味。「完了」や「未完」の熟語からも明らかのように、行き渡るという動きが入るのが「完」の特徴であり、「全」は象嵌がびっしりはめ込まれて欠けのない静的空間の状態が特徴である。また「完璧=璧を完^{まっ}うす(宝石を無傷に保った故事から、欠点がないこと)」とも解説する^[9]。

3. 「安」「全」の和訓の検討

3.1 「安」にあてる和語の検討

3.1.1 時代別国語大辞典：上代編と室町時代編の整理

表2と表3は時代別国語大辞典の上代編と室町時代編に掲載の「安」語頭の語彙のうち、「安全」及びその関連語の動詞・形容詞を中心にとりまとめたものである。なお表3は、若干の例外はあるが、表2との比較に必要な語彙に制限している。また上代編の凡例によれば、見出し漢字は用例に掲げた上代語の漢字表記として代表的な表意表記を括弧に入れて示し、二種以上の漢字表記を並べているものは、より一般的なものを先に挙げている。本論でもこの方式の表記とする。

上代編(表2)の特徴を整理すると、第一に指摘したいのは、上代編には語頭の「安」を「アン」と読ませる見出し語は一つも無いことである。したがって「アンセン【安全】」の見出し語も無い。「安」をあてる言葉としては、固有名詞を除けば、「ヤス【安】(形状言)、ヤスイ【安寝】▼(名詞)、ヤスシ【安・易】(形ク)、ヤスマル【安】(動四)、ヤスミシシ【八隅知之・安見知之】(枕詞)、ヤスム【安】(動下二)、ヤスムシロ▼(名詞)、ヤスマフ【休息安】(動四)、ヤスラカ【安】(形状言)、ヤスラケシ【安】(形ク)」を確認できる。ただし、発音は「ヤスム」であるが「安」ではなく「息」を当てる「ヤス

ム【息】(動四)」もある。しかし第一報で扱った動詞「ヤスンズ」は無く、動詞としては「ヤスム」「ヤスマル」「ヤスマフ」のみである。なお「▼」は表2に入れていない印である(おもに名詞形)。また「形状言」とは形容詞や形容動詞の語幹を指す。

これに対して、室町時代編には「安」語頭で「アン」と読む熟語はかなりの数があり、見出し語として「安全」「ヤスンズル」も掲載されている。当然のことではあるが、第一報^[24]で日葡辞書で取りあげた語彙は見出し語とは限らないが、すべて掲載されている。また、日葡辞書にはなかった「アン【安】」も見出し語となっているので、表3に加えている。

なお室町時代編では「安」を「アン」と読む熟語は多いので「安全」以外は表3に加えていない。また「ヤス」とよむ関連の和語で、見出し語になっているもののうち、表3に加えなかったのは固有名詞を除いて「ヤスカタ(安方)*、ヤスガヒ(安買)、ヤスミ(休)(名)*、ヤスミギ(休木)*、ヤスミジョ・ヤスミドコロ(休所)*、ヤスメコトバ(休詞)、ヤスメジ(休字)、ヤスモノ(安物)、ヤスラヒ(休)」である。「*」は日葡辞書にも見出し語としての掲載有りの印である。

3.1.2 「ヤスミー・ス」と大君(天皇)にかかる枕詞

日本国語大辞典では「ヤスンズル」の基本構造について「形容詞「ヤスシ」の語幹に「ミ」の付いた「ヤス-ミ」に動詞「ス」の付いた「ヤスミー・ス」の変化した語」と解説する。しかし、上代編にも室町時代編にも「ヤスミ」も「ヤスミー・ス」の見出し語も無かった。

しかし上代編にはその派生語に見える枕詞「ヤスミシシ」の掲載があり、「我が大君・我ご大君にかかる。八隅をしろしめす天皇の意か。」と解説する。室町時代編では「ヤスミシシ」で

表2 『時代別国語大辞典：上代編』掲載の「安」関連の和語

見出し語	品詞等	解説	備考
ヤス(安)	形状言	安らかなさま。安穩な状態。	形容詞「ヤスシ」語幹 文献：万葉集 3633,95,2089, 祝詞祈年祭, 神代記上
ヤスシ (安・易)	形ク クルシの対	① 安らかである。おだやかである。平穩である。心の状態についていうことが多い。 ② 容易である。たやすい。 ③ 動詞連用形に接して用い、その動作を行うことが容易である意を添える。②の形式化したもの。「易」の字で表記されることが多い。	遊仙窟の傍訓には「賤価(ヤスキアタヒ)買千金」のように安価である意に用いた例がみられる。 文献：① 記允恭, 万葉集 3760, 靈異記下 38, 出雲風土記意宇郡, 崇神紀 12年・私記丙本 ② 万葉集 3694,93, 常陸風土記行方郡 ③ 万葉集 885,1804,583,3031, 神代紀上
ヤスマル (安)	動四 ヤスム(四段) のラ行再活用	平穩である。安らかである。病の回復している意に用いることもある。(ヤスムよりも状态的・持続的な意味がある。)	ヤスム(安)(下二段)に対する自動詞 文献：五一詔, 後紀天長四年
ヤスミシ シ	枕詞	我が大君・我ご大君にかかる。八隅を知るしめす天皇の意でかけたか。 文献：記景行, 雄略記五年, 万葉集 3,152,926, 続記天平十五年, 熱田縁起	天皇を賛美した枕詞の一つである。「八隅知之」の用字は万葉に現れ、釈日本紀(和歌)にも「八隅知之」と注しているように、八隅を知るしめすの意で我が大君にかけたらしいが、もとの意味は確かではない。なお、ほかに人麻呂・赤人の作歌などに「安見知之」と書かれているのは、当時、安らかに見そなわすという解釈も一方で行われていたことを示す
ヤスム (息)	動四 形容詞ヤスシ と同根。	心やすらかにいこう。休息する。	ヤスム(安)(下二段)に対する自動詞 文献：万葉集 928,3825, 靈異記下 36, 神代紀上, 遊仙窟 ヤスマルはこれからの派生
ヤスム (安)	動下二段	心や身体を休息させる。	ヤスマル, ヤスム(動四)に対する他動詞 文献：万葉 794,2908,1289, 皇極紀元年, 東征伝
ヤスマフ (休息安)	動四	休む。休んだままで居る。	ヤスム(動四)に動詞語尾フのついたもの 文献：五一詔
ヤスラカ	形状言	安らか。穏やか。無事。	ナリもしくはニを伴って用いる 文献：神代紀下・私記乙本, 崇神紀十一年・和記丙本, 天武記朱鳥元年
ヤスラケ シ(安)	形ク	おだやかである。やすらかである。平ケシと類義。	ヤスラカからの派生。 文献：祝詞大殿祭, 六詔

はないものの、明らかにその派生形の枕詞「ヤスミシル」の掲載がある(ヤスミシル【八隅知る】：万葉集の「ヤスミシシ【八隅知之】」から転じた語。四方八方のすみずみまでお治めになる意で、「君」「神」などにかかる枕詞)。

「ヤスミシシ」を「ヤスミ」「ヤスミス」の手がかりと考えたのは小学館古典大辞典^[5]の「ヤスミシシ」の解説による。万葉集での表記パターンとして「八隅知之」(24例)「安見知之」(6例)「安美知之」(1例)を指摘したうえで、「八

隅知之」は八方を統べ治める意、「安見知之」は安らかに治める意と解説し、万葉集にはすでにその二つの解釈がおこなわれていたことがわかると解説する。さらに「鳴く」「鳴る」「鳴す」が同語根から派生したように、「知(領・敷)く」「知(治)る」のほかに「知す」(推定語)があったらしく、その連用形が「知し」であり、この形が連体修飾語(枕詞)となったとも言い添え、「シシ」は、統治する意と記す。加えて角川古語大辞典^[6]でも「ヤスミシシ」の項で「八方

表3 『時代別国語大辞典：室町時代編』掲載の「安」関連の和語

見出し語	品詞等	解説	備考
ヤスカ (安か)		「やすらか」①に同じ	
ヤスゲナシ (安げ無し)	形ク	そぞろ不安に駆られて、心が落ち着かない状態である。	
ヤスシ (安し, 易し)	形ク カタシ の対	① 困難や障害がなく、簡単に事を実現させることができるさまである。「難(カタシ)」の対。 ② 動詞の連用形に付いて、その行為が予想に反して簡単に実現されるものである意を表す。 ③ 物の価格が、楽に支払うことができる程度である。 ④ 将来に心配や不安がなく、落ち着いた気分でいられる状態である。	日葡解説有(ヤスイ(安い), ヤスウ(安う), ヤスカラズ(安からず)とその文語 ヤスシと読む語: 易林節用「賤・安・寧・易・泰」和漢節用「安・易」落葉「易・安・泰」
ヤスマル (休る)	動四	心配・不安などが一時おさまる。	
ヤスミシル (八隅知る)	枕詞	万葉集の「八隅知之(ヤスミシシ)」から転じた語。四方八方のすみずみまでお治めになる意で、「君」「神」などにかかる枕詞として用いられる。	
ヤスム (休ム)	自動詞	① それまでの疲労を癒すために、続けてきた活動や勤めを一時やめて、心身を楽にする。また特に、横になって寝る。 ② 激しい苦悩や憤りなどが、一時やわらいでおさまる。	日葡解説有
	他動 下二	① 続けてきた活動をそこで一時やめて、それまでの疲労をいやすようにする。 ② 心身の激しい苦痛や苦悩・憤りを、一時的にしずめ、やわらげる。	日葡解説有
ヤস্যスト (安安と, 易易と)	副詞	① 当然予想される困難や障害もなく、いとも簡単に事がなしとげられるさま。「ヤস্যス」とも。 ② もってまわったところがなく、いかにも平易な感じのするさま。 ③ きわめて安価で取引するさま。	日葡解説有
ヤスラカ (安らか)		① 心配・不安がなく、心穏やかな状態である。 ② いかにも平易な感じのするさまである。	易林節用「坦然(ヤスラカナリ)日葡「ヤスラカニ:副詞 容易に」
ヤスラフ (休フ)	動四	① しばしその場にとどまって休息する。しばし立ちどまっている。 ② 進みかねて、その場にぐずぐずしている。→たちやすらふ	日葡解説有
ヤスンズ (安ず)	動サ変	心配・不安などを除いて、そのものが平穩裡にあるようにする。	日葡解説有
ヤスゴコロ (安心)		心配もなく、心穏やかな状態であること。またその心情。多く打消しの言い方に用いられる。	(狭衣の中將, 実隆公記)
ヤスダイジ (安大事)		物事にはその実現において、さほど問題とならない面と容易ならざる面とがあるものであること。又、特にその後者の憂うべき一大事を取り上げていう。	(甲陽軍艦, 天草平家)
アン(安)		① 危険がなく、平安・無事であること。 ② 安息。休息。	「安と危との機は、そつとちつとの処に謀て定るものなり」史記抄
アンセン (安全) (アンゼンとも)		① 世の中の状態や天候など、周囲の状況が平穩無事であること。 ② 危険から守られていて安心できる状態にあること ③ 能楽論で、芸が安定し、危なげない境地に至っていることをいう。→あんせんおん(安全音)	日葡解説有 「アンセン(安(ヤスシ)全(マツタシ))」落葉

を統べ治めるという考えは、きわめて中国的な発想法と考えられるので、本来安らかに治める意で使われていたところに、中国の影響をうけるようになって「八隅知之」という用字法ができたものか。シシは、動詞のナク（鳴く）・ナル（鳴る）に対して、ナス（鳴す）という語があったように、シク（領く）・シル（領る）に対して、おそらく存在していたに違いないシス（領す）の連用形と思われる。したがって、意味は「領有する」「統治する」になる。」と同様の解説をしている。

まとめると、「ヤスミシシ」は大君（天皇）にかかる枕詞として上代を中心に通用しており、また「シシ」が「治める、統治する」の意味である。八方を統べ治めるのが中国の発想というのであれば、同じ発音の「ヤスミ」には「安見」に近い意味の言葉がそれ以前から伝えられていたと考えても不思議ではないであろう。改めて「安らかに治める」の意味を考えると、天皇にかかる枕詞で天皇統治の様子に関係するものであるとすれば、賛辞の言葉であるはずであり、その形容的イメージは「穏やかに」あるいは「やすやすと（易易と）（安安と）」あるいは「楽々

と」「悠々と」あたりだろうか。どれでもありそうであるが、賛辞としての枕詞は現実の説明として選ばれているとは限らないだけに、どれかの確定は簡単ではない。少なくとも辞書類の検討からでは難しい。

これに対して、時代の区別なくすべてを集めようとした日本国語大辞典では「ヤスミ」「ヤスミース」「ヤスミシシ」「ヤスミシル」はもちろん、その関連語の「ヤスミシール」「ヤスミ」まで掲載する（表4）。ちなみに、見出し語の仮名文字中の記号「-」は語の構成上、結合箇所のみらかなところに入れたものであり、「・」は活用する言葉に関して、その活用語尾の前に入れたものである。本論では紛らわしい場面に限って区別のために挿入している。

表4の並べ順は記載文献の古い順とした。上代編の枕詞「ヤスミシシ」が一番古く、古事記などを含めて8世紀前半に用いられていたことが分かる。次は8世紀後半の万葉集を挙げる「ヤスミ【安-、易-】」であり、「（形容詞（ヤスイ）の語幹に「ミ」のついたもの。→み）やさしいので、簡単なので。」と解説する。ただし代表的な古語大辞典類 [5]～[8] には記載のない見出

表4 「ヤスミ、ヤスミス、ヤスミシシ等」の解説と文献リスト（文献 [3]）

見出し語	解説	文献名と作成年代
ヤスミシシ 【安見知・八隅知】	枕詞：国の隅々まで知らず（治める）意、または安らかに知ろしめす意から、「我が大君」およびその変形である「我ご大君」にかかる。	古事記 712, 日本書紀 720, 万葉集 8C 後（柿本人麻呂 1 首と山部赤人 1 首）
ヤスミ 【安-, 易-】	（形容詞「ヤスイ」の語感に「ミ」のついたもの。→み）やさしいので、簡単なので。	万葉 8C 後
ヤスミシール 【安見知・八隅知】	枕詞：（上代の枕詞「ヤスミシシ」に当てた漢字の「知」を「しる」と読んでできたもの）「我が大君」「我が天皇（スベラギ）」にかかる。	顕輔集 1155 頃, 玉葉 1312
ヤスミシール 【八隅知】	自ラ四（枕詞ヤスミシシにあてた「八隅知」からできた語）天皇として天下を統治する	新古今 1205, 新続古今 1439
ヤスミース【安見】	他サ変 安らかに天下をお治めになる。	類従本撰集 1250 頃
ヤスミ【八隅】	名詞（枕詞ヤスミシシの「やすみ」に万葉集で「八隅」と表記したものがあるところから用いられる語）（天皇の治める）国土の四方八方のすみずみ。→「八隅知（ヤスミシ）」	夫木 1310 頃, 浄瑠璃・用明天皇職人鑑 1705 頃

し語である。そのため万葉集二首^(注1)にもどって確認したところ、二首とも現代感覚で漢字を当てるなら「易」であり、【易-】に該当する用法はかなり早期から用いられていたことが推定できる。しかし小学館古語大辞典「ヤスシ」の解説の中で「万葉集では表記が「安」か「夜須」「也須」であり、「易」の表記は「落易〈988〉」「朝露乃銷易件〈1804〉」の二例のみである。」との解説もある。そのために【易-】の前に【安-】を位置付けているものと考えられる。

次は平安期、室町時代より前の文献を挙げる枕詞「ヤスミ-シル【安見知・八隅知】」である。「ヤスミシシ」に当てた漢字「知」を「シル」と読んできたものという。

次は、新古今集(1205)、続新古今集(1439)を挙げる動詞(自ラ四)「ヤスミ-シ・ル」である。先の「ヤスミ-シル【八隅知】」由来の言葉として「天皇として天下を統治する」の意と解説する。当てはめる漢字は「八隅知」であり、これまでの流れを踏まえて一般動詞化したものといえよう。新古今集が世に出た時期は朝廷の存続に汲々としていた時期でもあるが、枕詞でなくなっても、なお天皇による天下の隅々までの統治の言葉として受け止められていた様子が見えてくる。

その次が類従本撰集(1250頃)を挙げる「ヤスミス【安見】」であるが、「ヤスンジ、ヤスンズル」の元の形が「ヤスミ-ス【安見】」であることから、この項については次節(3.1.3.3「ヤスンズル」)で取り上げる。

最後は「ヤ-スミ【八隅】」であり、「(天皇の治める)国土の四方八方のすみずみ」までを指す。

3.1.3 動詞形「ヤスム」等と「ヤスンズル」

3.1.3.1 「ヤスム」

上代編(表2)と室町時代編(表3)の比較で一番目立つ違いは動詞である。上代編に動詞「ヤスンズル」の見出し語は無いが、語幹を同じ

くする別の動詞がある。それが「ヤスム」である。ちなみに「ヤスンズル」とは似ている面もあるが、異なる面もあり、この点は節を改めて取り上げる(3.1.5 語幹「ヤス」)。

上代編では「ヤスム」の動詞四段(以後は動四と略)には漢字「息」を当て「心やすらかに憩う」と解説し、他動詞下二段(以後は他下二と略)には「安」を当て「心や身体を休息させる」と解説する。また動四「ヤスム」のラ行再活用動詞に「ヤスマル【安】」(動四)があり、他下二「ヤスム【安】」に対する自動詞と解説し、「安」を当て「平穩である。安らかである。病の回復している意に用いることもある。ヤスムよりも状态的・持続的な意味がある。」と解説する。

また動詞「ヤスム」に動詞語尾フのついた動四「ヤスモフ【休息安】: 休む。休んだままで居る」の掲載もある。「休息安」は、文献の続日本紀(五一詔)「天皇が^{みかど}朝を暫くの間も籠り出でて休息安母布事無く」に由来すると推測できる。

室町時代編を上代編との比較の観点から整理すれば、共通するのは動四・他下二「ヤス・ム」、動四「ヤスマ・ル」であるが、当てはめる漢字はいずれも「休」であり、「息」でも「安」でもないのが特徴である。動詞に限定すれば、「ヤスン・ズ【安ず】」以外の動詞は全て「休」を当て、室町時代編から加わる動四「ヤスラ・フ」の漢字も「休」である。つまり、表意の漢字は「息・安」から「休」に変更されている。

また、上代編では「心や身体」をあわせて「休息」と大まかな解説をしているが、室町時代編では身体を休める意味と、苦悩や苦痛、憤りなどを一時的にしずめ、やわらげる、止める意味とを分けて解説する。しかし小学館古語大辞典^[5]では「ヤスム【休】」に関して「[形容詞「ヤスシ」、形容動詞「ヤスラカ」などの「ヤス」から派生した語。まず「I(自マ四)」が成立し、そ

の使役相として「Ⅱ（他マ下二）」が派生したもので、その過程は「立つ」「開（あ）く」などと類似する。自動詞としての「ヤスム」は万葉集などにおいても“休息する”意と“思考や行為が止む”意とがあり、中古以後においてもこの二つの意味が類をなしている。他動詞化した場合もはっきりこれに対応して、休息させる意と、苦痛を緩める意とに類別できる。（原田芳起）」と解説する。それを考慮すれば、上代編と室町時代編とは整理法も本論で取り上げるほどの意味の違いではないといえよう。

日本国語大辞典の「ヤス・ム」等の関連動詞の解説と文献をまとめたのが表5である。時代別国語大辞典との違いは「ヤス・ム」に当てる漢字を「休・息」でほぼ統一している点である。なお見出し語「ヤス・ム」には“安（ヤス）いと同語源”とも記し、語源説として七種類の文献を列挙するが、追究はしていない。例外は、自ラ五「ヤスマル」に当てはめる漢字は「休・安・息」とあり、「安」も復活させている。もう一つ例外があり、「ヤスラ・ウ」であり、当てる漢字は「休」のみである。なお上代編の「ヤスマフ【休息安】」は室町時代編には無いが、日本国語大辞典では解説も文献も同じであるが、見出し語に当てはめる漢字はやはり「休」である。

なお、代表的な古語辞典類〔5～8〕で動詞「ヤスム、ヤスミ」に対して「休・息」と記すのはこの日本国語大辞典の他には角川古語大辞典^[6]のみであり、他は「休」のみの表示である。したがって「息」を敢えて復活させているようにも見えるが、その理由は見つけられなかった。

上代編にも室町時代編にもない整理として、日本国語大辞典では文語の他マ下二「ヤスム」を「ヤス・メル【休・息】他マ下二」としてまとめた記述をしている。この他マ下二「ヤス・メル【休・息】」の解説では先に指摘の整理法「休息させる意と苦痛を緩める意とに類別でき

る」を、「活動を停止して、休息する」を更に二つに分けることで、「① 休息させる。やすませる。② やすらかにする。おだやかにする。なだめて心を落ち着かせる。③ 一時活動を停止させる。」（実際には④⑤もあるが、特殊であるので除外）と三つに分ける。

なお自マ五「ヤスム【休・息】」では「① 活動を中止して憩う。休息する。② 心身が安らくなる。③ 動き、働きが止む。事が止んで静かになる。④ 休息するために横になる。臥す。寝る。ねむる。⑤ 病気が治る。病が平癒する。」の五つに整理しているが、休息の次の展開として、横臥系と、病平癒系が付け加わった形と解釈すると、整理法に大きな違いはないことになる。

ちなみに漢字「息」は「いきをすること、また、いきのこと」を古代漢語で*siak といい、「息」で表現しており、「いき」は生命の気と関係があるので、“生きる”という意味を生じる。また、いきをすることによって、元気を回復させることができるので、“休む”という意味を生じる。」とも解説し、生きる（生息）と休む（休息）の二つの展開系を示す<<① 生きる（生息）→生む i) 生まれた子（子息）ii) 小さなもの（利息）② 休む（休息）→止む→止める（息災）>>^[9]。なお「憩」のコアイメージは「（息が）スムーズに通る」であり、鼻から息をスムーズに通してホッとすることを暗示させるとも解説する^[9]。

これに対して漢字「休」はやすむことを古代漢語で*hrog といい、この聴覚記号を視覚化するために工夫されたのが「休」の図形という。コアイメージは「（身を）大切にかばう」で好・孝と同源で、図形に「木」をもってきたのは何かにかばわれるイメージをこめるためという^[9]。これから推測できることは、「息」は「息災」と用いるような「止める」の意味もあって同時に、元気の回復やほっとする等の意味も強い。これ

表5 「ヤスム」関連動詞の解説と文献（文献 [1]）

見出し語		解説	文献名と作成年代
ヤスム 【休・息】 (安いと同語源)	自マ五 (四)	① 活動を中止して憩う。休息する。	万葉 8C 後〈遣新羅使人〉, 源氏 1001 ~ 1014, 山家集 12C
		② 心身が安らかになる。	堀川百首 1105 ~ 06, 風雅 1346 ~ 49 頃,
		③ 動き, 働きが止む。事が止んで静かになる。	宇津保 970 ~ 999 頃, 自然と人生 1900 (徳富蘆花)
		④ 休息するために横になる。臥す。寝る。ねむる。	源氏 1001 ~ 14, 大日経治安二年点 1022, 御巫本日本紀私記 1428, 和玉篇 15C 後, あきらめ 1911 (田村俊子)
		⑤ 病気が治る。病が平癒する。	霊異記 810 ~ 824, 讃岐典侍 1108 頃
	他マ五 (四)	仕事などをしばらくやめる。また, 学校や勤め先, 会合などを欠席する。欠勤する。	俳諧新選 1773), 二老人 1908 (国木田独歩)
他マ下二	⇒やすめる (休)		
ヤス・メル 【休・息】	他マ下一 文語ヤス・ム (他マ下二)	① 休息させる。やすませる。	日本書紀 720, 万葉集 8C 後, 源氏 1001 ~ 14, 謡曲鶉飼 1430 頃, 浄瑠璃・用明天皇職人鑑 1705, 滑稽本浮世風呂 1809 ~ 13, 蓬萊曲 1891 (北村透谷), 朝の悲しみ 1969 (清岡卓行)
		② 安らかにする。おだやかにする。なだめて心を落ち着かせる。	日本書紀 720, 万葉集 8C 後 (山上憶良), 源氏 1001 ~ 14, 平家物語 13C 前, 日葡辞書 1603 ~ 4, 浄瑠璃・冥途の飛脚 1711 頃
		③ 一時活動を停止させる。	源氏 1001 ~ 14, 社会百面相 1902 (内田魯庵), 彼岸過迄 1912 (夏目漱石)
		④ 和歌・連歌などで, 特に意味のない言葉をおいて, 調子をととのえる。	ささめごと 1463 ~ 64
		⑤ 殺す。	番町皿屋敷 1916 (岡本綺堂)
ヤスマ・ル 【休・安・息】	自ラ五 (四)	① 心身が安らかになる。疲労や緊張が解かれて楽になる	続日本紀 771, 天理本金剛般若経集験記平安初期点 850 頃, 蜻蛉 974 頃, 人情本・英村暖話 1838, 苦の世界 1918-21 (宇野浩二)
		② 苦痛がおさまる。病気などがなおる。	続日本紀 771, 石山寺本金剛般若経集験記平安初期点 850 頃, 今昔 1120 頃か
ヤスモ・ウ ヤスモフ 【休】	自ハ四	《動詞「ヤスム (休)」に反復, 継続を表す助動詞「ふ」が付いた「やすまう」の変化したもの》やすみつづける。やすんだままである。	続日本紀 771
ヤスラ・ウ 【休】	自ワ五 (ハ四)	① どうしようかと迷って, 行動に移れないでいる。ためらう。たゆたう。躊躇する。	宇津保 970 ~ 999 頃, 源氏 1001-14, 新古今 1205, 浄瑠璃・女殺油地獄 1721
		② 足を止める。一所に止まってぐずぐずする。たたずむ。	蜻蛉 974 頃, 源氏 女殺油地獄 1001-14, 栄花 1028-92, 観智院本名義抄 1241, 蘇我物語(南北朝頃), 虎明本狂言・角水(室町末-近世初)
		③ 休んでゆっくりする。休息して様子をみる。	源氏 1001-14, 太平記 14C 後, 鶴 1952 (長谷川四郎), 記念碑 1955 (堀田善衛)
		④ 仮にとどまっている。旅先で滞在している。	平家 13C 前
	他ハ下二	休ませる。ゆるめる。	古今著聞集 1254

に対して「休」は「身をかばって停止する」であるが、活動の停止、停止したことに絡む状態に焦点がある。そのため気持ちや気力に関連する解釈のあるケースには「休・息」とし、活動の停止関連の解釈の強いケースには「休」のみ当ててるように見える。

上代編での「ヤスム【息】」の文献は遊仙窟「南有樛木不可休息^{やすむ}」, 「ヤスマル【安】」の文献は続日本紀（五一詔）「大臣明日は参出来へむと待たひ賜ふ間に休息^{やすま}安麻^{まり}利て参出ます事は無く^{まき}て」「天下の公民の息^{おほみ}安麻^{やす}流^{まる}べき事を」であり, 「ヤスマフ【休息安】」の文献は先に示した通りである。当てはめる漢字が多様な万葉仮名の解釈は専門知識がないと難しいが、文献から見る限り、古くは「(休)・息・安」の重なるところに和語の中核的な意味があったように見える。この点も含めて節を改めて取り上げる（3.1.5 語幹「ヤス」）。

3.1.3.2 「ヤスラフ」と「ヤスラグ」

上代編には無いが、室町時代編と日本国語大辞典にある「休」を当てる動詞に「ヤスラフ」がある。室町時代編では「ヤスラ・フ【休ふ】動四 ① しばしその場にとどまって休息する。しばし立ち止まっている。② 進みかねて、その場にぐずぐずしている。→たちやすらふ」と整理する。日本国語大辞典でも自ワ五（ハ四）および他ハ下二として「ヤスラ・ウ（ヤスラフ）【休】」の掲載がある。しかし同じ小学館古語大辞典^[5]の「ヤスラフ【休ラフ】」の解説には「やすらか」とは意味の隔たりが大きく、「やすむ」の意図の脈絡があるようである。「やすむ」の語幹「やす」に接尾語「らふ」が付いたと見なした方が、意味が理解しやすい。思考や行動を停止して、その状態がしばらく持続している意がすべての基底をなしている。中古から中世にかけて多く用いられ、後世、「ためらふ」の意味がこれと接近して、その結果「やすらふ」が後退

し、死語化してゆく。（原田芳起）」という語誌解説もある。発行は古語大辞典初版が1983年、本論での確認は1994年版であり、日本国語大辞典初版が1972年であり、第二版増補版2000年であるが、少なくともこの見出し語の解説についての変更はない。

なお岩波古語辞典^[7]では「ヤスラ・ヒ【休ラヒ】（動四）」として「《ヤスシ【安】と同根。「ヒ」は反復・継続を表す接尾語。事の進行、骨折りをしばらく止めている意→ヒ》」とまとめており、また角川古語大辞典^[6]も「ヤスラフ【休】」について「「フ」は継続の助動詞として、「休む」「安し」と同根。さっさとしてしまわずに、停滞、時間を引き延ばすことをいう」とのまとめ方をしている。

また上代編にも室町時代編にもなく、日本国語大辞典に掲載の関連動詞に「ヤスラ・グ【安】自ガ五（四）：安らかな気持ちになる。ゆったりと落ち着いた心持になる。（北野天満宮縁起 1213, スポーツ賛 1949〈佐々木基一〉）」がある。広辞苑にも「ヤスラ・グ【安らぐ】」の記載があり、自五「安らかな気持ちになる。穏やかな気持ちになる。「心の〜ぐ暇がない」と解説する。

他に、日本国語大辞典には「ヤスラ・ゲル【安】他ガ下 一 安らかな気持ちにさせる、落ち着かせる。」の掲載も有るが、文献は無い。広辞苑も全く同じ記述で文献も無い。

3.1.3.3 「ヤスンズル」

最初に表4（3.1.2）で残した「ヤスンジ、ヤスンズル」の元の形「ヤスミー・ス【安見】」をとりあげる。日本国語大辞典では「ヤスミー・ス【安見】」を動詞（他サ変）として「安らかに天下をお治めになる」と解説し、文献には類従本撰集（1250頃）を挙げる^(注2)。既にこの時期は朝廷とは別に武家政権が成立し、実質的支配を始めていた時代であった。この言葉は枕詞ではなく一般動詞であるが、それでもその当時は“天

皇による安らかな統治”のイメージと重なって用いられる言葉であったらしい。

しかしそれから約三百年後の日葡辞書作成中の織豊時代には、もっと一般的な動詞「ヤスンジ、ヤスンズ、ヤスンズル」の形となり、もはや枕詞の天皇のイメージは薄らぎ、広く支配者層の言葉として用いられていたと推測できれば、室町時代編の動サ変「ヤスンズ【安ず】」の解説が「心配・不安などを除いて、そのものが平穩裡にあるようにする」は理解しやすい。文献には日葡辞書、玉塵22、太平記、全九集を挙げる。ちなみに日葡辞書では「ヤスンジ、～ズ、～ズル：平穩に統治し、支配すること」である。

誰が天下を統一支配するか不明の時代に使われた「ヤスンジ、ヤスンズル」だからこそ、歴史的経緯も加わって支配者層の目線で「心配・不安などを除いて、そのものが平穩裡にあるようにする」や「平穩に統治し、支配すること」と認識されることになったとも推理できる。しかし他方で、そう簡単には実現しそうにない状況でもあったからこそ、日葡辞書の用語解説に見るように、平和の願いや思いが関連語の中に強く表れることになったとも推測できる。

日本国語大辞典では「ヤスン・ズル【安】文語ヤスン・ズ」を自動詞と他動詞とに分けて解説する。自サ変は「① 安らかになる。平安になる。安んじる。(当世書生気質 1885-6〈坪内逍遙〉、韓国併合の詔書 1910) ② 与えられた状態などに満足する。甘んずる。安んじる。(新聞雑誌9号明治四年 1871、浮雲 1887-89〈二葉亭四迷〉)」と解説し、他サ変の解説は「① 安らかにする。やすめる。安んじる。(古文尚書平安中期点 950 頃、医心方 1145、太平記 14C 後、三体詩素隠抄 1622、用明天皇職人鑑 1705、十善法語 1775、小学読本 1873〈田中義廉〉) ② 甘く見る。軽く見る。あなどる。安んじる。(滑稽本・浮世床 1813-23)」である。

文献の年代と用法の組み合わせから特徴的な違いを認めることができる。他サ変「ヤスン・ズル【安】」に挙げる文献は古い時代のもが多く、“小学読本 1873”の例外はあるものの、それ以外は新しくても江戸中期頃までである。

これと対比的なのが自動詞サ変の用法である。こちらの文献はみな明治期のものである。ただし大正・昭和の文献もない。もっとも辞書類から、そうした見当を付けること自体に無理があり、さらに使われていないという証明は辞書に限らず難しい。しかし現代社会では「ヤスンズル」はもはや使われない言葉になっているといっても過言ではないだろう。

動詞「ヤスン・ズル【安】」(自ザ上一、他ザ上一)はサ変動詞「ヤスン・ズル【安】」の上一段化したものであり、その意味の解説はサ変「ヤスンズル」と同じとする。しかし唯一、大正期(今年竹 1919-27〈里見弴〉)の文献を挙げる程度でもある。

口語調で書くことが主流の現代社会では文語「ヤスンズ」は勿論、「安んじる」の表現もよく使われる言葉などではなく、「甘く見る。軽く見る。あなどる」の意味の表現はあるものの、「安んじる」と表現するより解説用語の直接利用(甘く見る、あなどる等)の表現の方が一般的であろう。つまり、「ヤスミシシ」を遠因とする日葡辞書の「ヤスンジ、ヤスンズル：平穩に統治し支配する」という他動詞的用法は、大きな戦いなくなり、基本的秩序が再構築されるようになった江戸中期頃までには死語と化した可能性がある、とも考えられる。

しかし明治維新前後は戦国時代とは種類の異なる危機的状況下にあった。他動詞に比べ、明治期の文献が挙がる自動詞サ変ではあるが、昭和・平成につながっている可能性は少なく、現代では「安んじる」に代わってむしろ「安心する」が頻用される傾向にある。広辞苑(2018)^[12]

では「ヤスンズル（安んずる） 文語ヤスンズ（サ変） ヤスミスの音便：I（自サ変） ① やすらかになる。平安になる。安心する。② それに満足して不満に思わない。甘んずる。II（他サ変） 安らかにする。安泰にする。（太平記）」と解説し、①に「安心する」が入る。そして名詞形ではあるが、「安全」はもはや単独ではなく「安心」との連語形「安全・安心」の組み合わせで使われ、順序を入れ替えた「安心・安全」も昨今ではよく見聞きするまでになっている。ちなみに他サ変では「やすめる、安んじる」に代わって「安泰にする」が入る。

3.1.4 和語「ヤスシ」「ヤスラカ」の検討

3.1.4.1 「ヤスシ、ヤスイ」

時代別国語大辞典の上代編にも室町時代編に

も形容詞「ヤスシ【安・易】」の見出し語は掲載され、解説分類でいえば、前者は三項目（表2）に、後者は四項目（表3）に整理している。上代編に欠けている項目は室町時代編の「③ものの価格が楽に支払うことができる程度である。」である。しかし上代編「ヤスシ」の【考】に「遊仙窟の傍訓に「賤価（ヤスキアタヒ）買千金」のように安価である意を用いた例がある」が書き加えられており、上代の頃からそうした用法は始まっていたらしい解説もある。

現代日本では「ヤスシ」は文語であり、現代語は「ヤスイ」と表現され、さらに「安い、易い」と書き分け、日本国語大辞典では九つに分類して解説している（表6）。表6の番号で、上代編と室町時代編の解説を再整理してみると、

表6 日本国語大辞典「ヤス・イ（安・易）」

解説	文献
① 物事のなりゆきに障害や不安がない。平穏である。安心していられる。	古事記 712, 万葉集 8C, 源氏 1001-14, 太平記 14C 後, 天草本伊曾保 1593, 談義本・無而七癖 1754, 尋常小学読本 1887, 五重塔 1891 (幸田露伴)
② らくらくと物事を行うことができる。容易である。たやすい。	日本書紀 720, 万葉集 8C, 源氏 (東屋), 近代秀歌 1209, 曾我物語 (南北朝頃), 正徹物語 1448, 天草本伊曾保 1593, 舞姫 1890 (森鷗外)
③ 責任が軽く自由である。気楽である	源氏 1001-14, 源平盛衰記 14C 前, 雁 1911-13 (森鷗外)
④ (廉とも書く) 値段が高くなく、金がかからない。他と比べて、質や量のわりに値段が低い。低廉である。安価である。	蘇悉地羯羅經延喜九年点 909, 白氏文集 天永四年 1113, 虎明本狂言張蛸 (室町末-近世初), 藪の中 1921 (芥川龍之介)
⑤ 格が低い。身分が低い。品質が劣っている。	観智院本名義抄 1241, 浮・傾城色三味線 1701, 談義本・根無草 1763-69, 歌舞伎・東海道四ッ谷怪談 1825
⑥ 粗末に扱うようである。見くびるようである。	滑・風来六部集 1780, 咄本・無事志有意 1798, 化銀杏 1896 (泉鏡花)
⑦ 人品などが下卑ている。下品である。	新撰大阪詞大全 1841, 今戸心中 1896
⑧ (動詞の連用形について、その動作が容易に行われる意を添える。②の形式化したもの) たやすくそうなる傾向がある。簡単に…する。らくに…できる。	万葉集 8C, 枕 10C 終, 守護国界天陀羅尼經平安中期 1000 頃, 小学入門 (甲号) 1874, 暗夜行路 1921-37 (志賀直哉)
⑨ → やすくない (安無：(形口) 男女の間柄などが特別である様子だ。ひととおりでない。また、その仲のよい様子などを冷かして言う語。おやすくない)	酒・寸南破良意 1775, 隣の嫁 1908 (伊藤左千夫), 彼岸迄 1912 (夏目漱石)

上代編は「①・②・⑧」、室町時代編は「①・②・⑧・④」となり、③は①にも②にも組み込まれうる内容を独立させたものとみなすなら、両方に③を加えることも可能であろう。そうすると現代と室町時代編との違いは⑤、⑥、⑦である。これら三つの解説は“軽蔑の意味を含む価値的に劣る物事”とまとめられよう。そしてこれらは、⑤に例外もあるが、⑤～⑦の多くは江戸時代以降の文献が記載されている。

古典基礎語辞典^[8]では「ヤスシ」の特徴について「本来は物事の成り行きについて困難がなく、容易に平穩に事が運ぶ状態をいう。転じてそのように困難がない状況において、気が楽である、心配がない、といった情意もあらわす。」と解説し、「格が低い。身分が低い。自分が余裕を持って接することができる関係、扱うのに造作のない者、すなわち自分より下位の者をさした。中世になって、見くびる意や価値の低いこと、廉価の意にヤスシを用いるのもここに通じる。」と解説する。

小学館古語大辞典^[5]では「ヤスシ：形クⅠ【安し】」の語誌で、語義について「Ⅱ③の用法(表6の番号⑧に該当)を除いて、他はほとんど心安らかである意に解せる。このことから、「ヤスイ」は元、何の苦労もない心安らかな状態を意味し、そこから容易である、安価である、の意が派生したものと思われる(小林正治)」と解説する。

「心安らかな状態」が先か「困難がなく容易に平穩に事が運ぶ状態」が先かの判断は難しいが、枕詞「ヤスミシシ」と同じ語幹をもつものだとすれば、大君(天皇)の統治にかかわる言葉だけに両方の意味合いの重なる形で受け止められていても不思議ではないだろう。

もう一つ確かなことは、現代では「易い」(文語：易し)と「安い」は明確に使い分けているが、その経緯を逆に遡れば「安」「易」両漢字の

特徴を重ねた意味を「ヤスシ」は含意しているということでもある。なお「ヤスシ」と訓ずる漢字は、易林節用集では「賤・安・寧・易・泰」、和漢節用集では「安・易」、落葉集では「易・安・泰」を挙げる。ちなみに節用集とは漢字の読みを示した辞書であり、室町時代から江戸時代にかけて幾つも発刊されているが、近代的な国語辞書とまではいかないものである。なお落葉集(1598年)は日葡辞書発刊の数年前に公刊されたキリシタン版の節用集である。

日葡辞書の見出し語に「ヤスシ」「ヤスウ」の見出し語があり、意味も「容易である(もの)、安価である(もの)」と解説しているが、当てる漢字は「安」である。しかし「タヤスイ【輒い】」の見出し語には「容易な(こと)」の解説がある。時代別国語大辞典のどちらにも「タヤスシ(形ク)」の見出し語がある。上代編では「容易である。何でもない。タは接頭語」と解説し、名義抄の「容易(タヤスシ)」を挙げて「→ヤスシ」とも記す。室町時代編では「タヤスシ【輒し】：① 問題となる事態を、大した苦労や苦心もなく実現するさまである。② 問題となる事態に対してしかるべき配慮なく軽率に対処するさま」と解説し、①には日葡辞書の用例を出し、易林節用集「容易(タヤスシ)・輒(タヤスシ)」も併記する。「輒」は現代日本社会では使わない漢字であり、精選版日本国語大辞典では「ターヤス・イ【容易】」、小学館古語大辞典では「ターヤス・シ【容易し】」を見出し語とする。ちなみに「タ」は手の古形を意味した接頭語であり、上代によく用いられたとも解説する。

3.1.4.2 「ヤスラカ」

現代でもよく使う言葉であるが、古くから使われてきた言葉でもあり、上代編にも室町時代編にも掲載されている。上代編では「ヤスラカ【安】」も形状言、すなわち形容詞や形容動詞の語幹として、ナリやニを伴って用いると説明し、

「やすらか、穏やか、無事」と解説する。「ヤスラカ」の解説冒頭に「やすらか」をもってくるほど説明を要しない言葉、あるいは別の言葉を用いてうまく説明しにくい言葉といえるのかもしれない。続く「穏やか、無事」の解説語が辛うじて言い替えた表現に見える。ちなみに次の見出し語も「ヤスラケシ【安】形ク：おだやかである、やすらかである。平ケシと類義。ヤスラカからの派生」とある。

室町時代編の「ヤスラカ【安らか】」は、易林節用集「坦然（ヤスラカナリ）」、日葡辞書「ヤスラカニ：副詞 容易に」を紹介したうえで、「① 心配・不安がなく、心穏やかな状態である。② いかにも平易な感じのするさまである。」と解説する。最初に指摘できることは、上代編にはない②の“平易さ、容易さ系”用法の追加である。しかし上代編の「ヤスシ」と「ヤスラカ」を比べてみると、“平易さ、容易さ系”の解説は「ヤスシ」には有り、「ヤスカラ」には無いが、「ヤスラカ」には「ヤスシ」にはなかった「無事」の解説が加わる。「無事」は心情的というよりもプロセスも含意する客観的な状態表現である。

日本国語大辞典では「ヤスラカ【安-】：形動（「か」は接尾語）」の解説は「① 穏やかで何の心配もないさま。平安なさま。静穏な状態。無事安楽。（日本書紀（720）、徒然草（1331頃））② 気楽なさま。ゆったりとして余裕のあるさま。堅苦しくないさま。（枕草子（10C後））③ ゆったりとして感じの良いさま。心が安らぐような様。（落窪物語（10C後））④ 楽々と事を行うさま。たやすいさま。無造作なさま。やすやす。（大智度論天安二年点（858））⑤ わかりやすいさま。平易であるさま。（開化のはなし（1879））」（精選版の文献を表記）である。上代編の「無事」は「無事安楽」とすることで矛盾しない形でとりまとめている。室町時代編の分

類にそって整理すれば“①・②・③”と“④・⑤”の二つのグループにまとめられる。

細かい整理法を棚上げすれば、室町時代編から大きく解釈が変わってはいないともいえる。なお「ヤスラカ」と捉えるか「ヤス-ラカ」と捉えるかの解釈は分かれているが、この違いに関しては本論ではペンディングとする。

3.1.5 語幹「ヤス」

上代編には語幹「ヤス」が見出し語として掲載されている。万葉集を用例に「やすらかなさま。安穏な状態。形容詞「ヤスシ」の語幹」と解説する。また「ヤスラカ」も形状言、すなわち形容詞や形容動詞の語幹として見出し語になっており、「やすらか、おだやか、無事。」と解説する。

日本国語大辞典でも語幹相当部分として「ヤス【安・易】」を取り上げるが、「語素」として次の三パターンの整理法を掲載している。「① 名詞と熟合して、平安、安穏の意を表す。「やすくに」「やすむしろ」「うらやす」など。（万葉集）② 名詞や動詞と熟合して、たやすくそうすること、そのようにしがちであることを表す。「やすうけあい」など。（天延三年庚申朝光歌合975）③ 名詞と熟合して、そのものの値段が安いこと、安くて粗末であることを表す。「やすもの」「やすやど」「やすね」など。また金額を表す語に付いて、ある時点の価格と比べてそれだけ安くなっていることを表す。「十円安」（くれの28日〈内田魯庵〉1898、生〈田山花袋〉1908）」であり、この語素別の整理を本論ではヤス（安・易）語素分類法と名付けておくことにする。

他に、「ヤス【安・易】」には「（名詞）① 安いこと。安目。② 盗みやすいことをいう、盗人の隠語名詞（隠語全集 1952）」の解説もある。

このヤス（安・易）語素分類法に似た整理法がある。日本国語大辞典の見出し語「アン（字音語素）」である。アンと読む漢字（安の他にも

奄、音など15の漢字)を列挙し、各字の特徴と熟語を簡潔に解説する。「安」の場合は、簡易な解釈分類法として「A やすらか、やすらかにする、B たやすい、あまり気を使わない、C 値段がやすい。」に整理し、各々に「安」の付く二字熟語計30語(重複を除く)を列挙する。Bには「安易」「安直」の二つを、Cには「安価」一つを挙げ、残りの「安」の熟語(27語)はAに分類している。ただし熟語採用基準は「安」を用いる熟語という以外は不明である。この分類法を対比的にアン(安)語素分類法と名付ける。数字に確かさはないものの分類A「やすらか、やすらかにする」の熟語解釈が多いことを示しているくらいはいえるであろう。

ただし、この分類は漢字「安」を軸に整理したものであり、本論では伝統の漢字「安」の概念的特徴を「(上から下に押さえて)じっと落ち着く」と定義しているので、分類A「やすらか、やすらかにする」は漢字「安」由来の意味と推測することは難しくないが、分類B「たやすい、あまり気を使わない」とC「値段がやすい」は基本の「安」概念からかなり乖離しており、分類BやCには別系統の漢字がふさわしい可能性は大きい。実際に、分類Bは現代では「易」を当てて使い分ける用法が定着している。しかし分類Cは現代でもなお「安」を当て続けている。

ヤス(安・易)語素分類とアン(安)語素分類の分類項目は、“分類①「平安、安穩の意」と分類A「やすらか、やすらかにする」”“分類②「たやすくそうすること、そのようにしがちであることを表す」と分類B「たやすい、あまり気を使わない」”“分類③「そのものの値段が安いこと、安くて粗末であること」と分類C「値段が安い」”の解釈を近似と解釈するなら、粗いまとめ方ではあるが、ほぼ一致しているといえよう。「ヤス～」の本質的特徴を把握したいとの目標から、本論では一致していると捉えて以後

の整理をすすめる。

粗い分類項目が一致しているということは、「ヤス」を語幹とする和語と、漢字の音読みを残した外来語の用法がほぼ重なることを意味する。「ヤス～」の言葉に「安」の字を当ててきた、つまり翻訳してきたのだから、当然の結論ともいえる。しかし漢語の音を残す用法は、当然のことながら漢字のもつ特徴の影響がないはずはない。また字音「アン」に当てる漢字は「安」だけではなくたように、「ヤス」に当てる漢字も「安」とは限らず、既にみてきたように、「易」は勿論であるが、「休」「息」などを含むと考えるべきであろう。

粗い分類項目は一致しているとしても、使い方の傾向まで同じだろうか。とりわけ「ヤス」を語幹にする関連語同士の識別は可能だろうか。この関心からこの分類を分析道具として利用することにした。本論ではこの二つの語素分類法の識別を特に問題にしない場合には単に「三分類法」と略記し、その際の分類項目もアン(安)語素分類のA・B・Cに代表させる。

日本国語大辞典は時代を超越した編集方針であり、それに対して時代別国語大辞典では扱う時代別であることから、単に文献の年代の識別にとどまらず、見出し語の有無も考察に入れて使い方の特徴を検討する。具体的にはこの三分類法を「ヤスシ、ヤスイ」(2.1.4.1)と「ヤスラカ」(2.1.4.2)の整理と比較検討する。

「ヤスシ、ヤスイ」についてであるが、室町時代編では三分類法に合致する。分類項目で表記すれば「ヤスシ：A + B + C」である。ただし上代編では分類C「値段がやすい」を欠く。つまり分類Cは途中から加わってきた、あるいは上代編は文献自体が相対的に少ないことを考慮すれば、少なくとも室町時代には顕在化していた用法といえよう。

次に問題になるのは、「ヤス～」と読ませて分

類C「値段がやすい」に該当する熟語はいつ頃からどのようなものがあるか、であろう。日本国語大辞典の「安」語頭の名詞形熟語で該当のものを列挙すると“安上（ヤスアガリ）19, 20, 安上（ヤスアゲ）18, 安遊（ヤスアソビ）18, 安隠居（ヤスインキョ）18, 安淫売20, 安売17-19, 安売店19, 安お山（下級の遊女）（屋）18, 安買（ヤスガイ）16, 19, 安鏡20, 安囲19, 安鱈18, 安合羽18, 安敵19, 安金（ヤスガネ）18, 19, 安官吏20, 安給金19, 安芸者18, 19, 安下絹18, 安下宿20, 安下駄19, 20, 安月給（取）20, 安玄関18, 安建築20, 安石代18, 安材料0, 安作者19, 安酒20, 安侍18, 安サラリーマン20, 安色道18, 安芝居19, 20, 安女郎18, 19, 安銭18, 19, 安畳20, 安煙草18, 20, 安玉20, 安魂19, 安積18, 安手19, 20, 安亭主18, 安泊19, 20, 安値19, 20, 安値物19, 安旅館（ヤスハタゴ）17, 安壇20, 安歩19, 安普請19, 20, 安札17, 18, 安筆20, 安筆屋18, 安報0, 安仏18, 19, 安見越0, 安見世18, 19, 安目18, 安物17-20, 安物買18, 19, 安物尽（ヤスモノズクメ）20, 安役者19, 安宿19, 20, 安寄席19, 安利19, 安料理屋20, 安礼者18, 19”となる。数字は該当文献年代を世紀単位で示したものである。例えば18は18世紀の意、0は文献記載の無いものである。

この特徴を大雑把にまとめれば、若干の例外はあるものの18世紀から20世紀にかけての語彙が目立つ。そして相対的に目に付くことになるのが分類Aと分類Bの語彙の少なさである。分類AやBに該当するだろう熟語を日本国語大辞典から抜き出してみると“「ヤスイ【安寝】心安らかに眠ること。落ち着いて眠ること。安眠。（万葉集 8C後）」「ヤスウケアイ【安請合】（名・形動）確信のあるなしも考えないで軽々しく保証すること。よく考えもせず軽々しく引き受けること。（鹿の子持 1772, 恵比良濃梅 1801, 四

天王楓江戸粧 1804, 浮世床 1813-23, 浮雲 1887-89)」「ヤスクニ【安国】：安らかな国。太平に治まっている国。（延喜式 927, 台記別記 1142, 歌意考 1764)」「ヤスゴコロ【安心】やすらかなこと, あんしん（源平盛衰記 14C前)」「ヤスダイジ【安大事・易大事】：①容易に見えて実際には一大事な事。たやすそうにみえて実際には油断がならない大事。（平家 13C前, 葉隠 1716 浄瑠璃・安部宗任松浦笠 1737, 人情本・清談若緑 19C中）②たやすいこととむずかしいこと。（甲陽軍艦 17C初)」「ヤスゲ【安-, 易-】（形容詞「ヤスイ」の語幹に接続詞「ケ」の付いたもの）①やすらかなさま。気楽そうなさま。（能因本枕 10C, 源氏物語 1001-14, 読本雨月物語 1776）②やすやすとできそうなさま。見た目に容易な感じであるさま。（枕草子 10C終, 栄花 1028-92頃, 名語記 1275)」「ヤスゲ-ナ・シ【安気無】（形ク）やすらかな様子が無い。やすらかでない。安心できない。不安である（紫式部日記 1010, 源氏物語 1001-14, 増鏡 1368-76)」「ヤス-ミテグラ【安幣帛】：安らかなみてぐら。また、足りないところのないみてぐら（延喜式 927）祝詞」「ヤスムシロ【安席】：やすらかなむしろ。据わり心地の良い敷物。安穩な席（日本書記 720)”である。ちなみに“幣帛”は現代では「ヘイハク」と読ませる神事用語である。

分類Bに関しては先に指摘したように、「タヤスシ【輒】（形ク）容易である。何でも無い。タは接頭語」という別の言葉が上代編から使われており、分類Bに該当する言葉の少なさはそのことで説明できるのかもしれない。

しかしヤス語素分類法で見てきた分類Aの相対的な少なさは、アン語素分類で見る結果とは対照的でもある。既に指摘したように、アン語素分類法の事例には、関連語彙を徹底的に数えたものではないものの、分類Aが圧倒的に多く、

分類Bと分類Cは数少ない。つまり分類A「やすらか、やすらかにさせる」は「アン」と発音する語彙が多く、分類C「値段が安い、安くて粗末」には「ヤス～」と発音する語が多いということになる。この対称性は何を意味するのだろうか。評価の高そうな物事の言葉には外来語読み（漢字の音訓み）をあて、安価など安っぽくみえる言葉には和訓をあてているのであろうか。

「ヤスラカ」の場合は、上代編はもちろん、室町時代編も、日本国語大辞典でも分類C「値段がやすい」を欠く。分類項目で表記すれば「ヤスラカ：A + B」であり、上代編ではさらに分類B「たやすい、あまり気を使わない」も欠く。歴史的には分類Aが結晶の核のような役割を果たしているのだろう。

こうした特徴を踏まえて「ヤス～」の一番古そうな形、枕詞「ヤスミシシ」を振り返ると、もともと大君（天皇）を賛美する枕詞として使われてきた言葉であり、しかも統治の観点からの言葉であったことを考えると、古くは分類AとBの両方の意味が未分離な捉え方をしていたとも推測できる。統治される側は“やすらか、おだやか、無事”に生活を続けられることに関心があっても不思議ではなく、統治者の立場からも、抵抗や混乱などの圧力を力づくで押さえ込んで等々ではなく、“スムーズに統治できる見通しがあること”は望むところであろう。それは統治者の心情としても“やすらか、おだやか”であろう。

分類AやBが特定の状態状況を問題にする語彙分類とすれば、次に問題にすべき語彙は何であろうか。そうした状態状況に移行する過程を問題にする動詞であろう。

「ヤス～」の特徴をもつ動詞として「ヤスンズル【安んずる】」系と「ヤスム【休む】」系を検討してきた。なお本論では自動詞と他動詞の区

別は棚上げして検討する。一定の状態、特に分類AやBを実現する“動作あるいは作業過程”に注目すれば「ヤスンズル（安んずる）」と「ヤスム（休む）」とはよく似た結果をもたらしうる動詞同士であることも明らかである。しかし同様の状態状況を出現させる「ヤス～」語幹の動詞ではあるが、当てる漢字の違いも明らかである。

「ヤスム」(3.1.3)で明らかにしたように、漢字「休」のコアイメージは「(身を)大切にしよう」^[9]であり、「人が木の陰にかばわれて休息するさまを示す。庇い労わるの意を含む。休む意はその派生義。」(学研新漢和大事典^[10])とも説明する。しかし白川静は『字通』^[11]において「人+木。木はもと禾形に作る。禾は袖木のある柱。軍門として左右に立てる表木。金文の図象にその両禾軍門の象を示すものがある。その表木の前で、軍功の人を表彰することを休という。…中略…説文に「息止するなり。人の木に依るに従う」とするは、形義ともに誤る。…① さいわい、よい、めでたい、よろこび ② さかん、大きい、うるわしい ③ やすらか、つつましい、ゆるす、おちつく ④ やすむ、やむ、いこう ⑤ ひま、いとま」と解説する。しかし①や②つまり「めでたい、大きい等」を意味する「休応、休嘉、休徴、休光、休烈」は日本では使われている様子が確認できないことから、本論では説文の解釈の延長で解釈する文献[9][10]の説を基礎に検討する。

「ヤスム」とはどのような動作だろうか。「休」の概念としてのコアイメージは「(身を)大切に守る」であるが、核心的動作の特徴はむしろ「活動の停止」ではないだろうか。単なる中止や取り止めとは異なる点を強調するなら「一時的」の言葉も必要になるかもしれない。続けてきた活動（敵との戦いのようなケースから日常生活上の仕事まで多様でありうる）を一時的であれ

止め、その負荷や重圧から解放されれば、それまでの緊張が解除され、ホッとしたり、心身をやすめたりできるだろう。それは疲れを解消することにもなり、心身が楽にもなろう。こうした動作結果内容が「休息する、休憩する」の具体的内容ではないだろうか。さらに「一時的」を考慮していえば、再び活動を始めることが前提となっているともいえるだろう。永久に活動を止める意味ではなく、休息をとって体調や体力を回復させることで、次の活動に繋げることを暗黙の前提にしている言葉でもある。生物が活動を永久に止めるということは死を意味するという点からも容易に納得できる動詞である。

漢字「安」のコアイメージは「(上から下に押さえて)じっと落ち着く」であり、字の構成は女が家の中に腰を落ち着けて居る状況を設定した図形といわれる。家の外の落ち着かない状況がどのようなものかは不明だが、家の中で腰を落ち着けて居られる状況は現代風に言えばシェルターの中に避難しているようなものであるから、その直後であれば、心身の緊張や苦勞から解放されてホッとしているであろうし、その結果として心身ともに軽く、楽になるだろうことは容易に想像できる。この状態は「ヤスム」とも重なる。この状況状態は三分類でいえば分類Aに該当するだろう。つまり「ヤスンズル」の基本的な結果状態も、「ヤスム」の基本的な結果状態も分類Aに該当する。文脈に違いはあるものの、動作的には似ているのだから、その結果が似ていても不思議ではない。しかし「ヤスンズル」は分類Bに該当する「たやすい、スムーズな展開、心の煩いなしにできる」意味にも展開し、やがてそれが分類C「値がやすい、安くて粗末、無造作、粗雑」などの意味にも展開する。

これに対して、「ヤスム」は分類BやCに展開することは歴史的には無かった。活動の停止

による休息、休憩の形は時には横臥となり、眠ることにもつながり、さらにそうしたことで、心身の緊張や疲れを癒すことにもなるから、病の回復や平癒にも意味は展開していく。さらに活動停止状態が一時的ではなく、止まっている時間が長引いたり、繰り返されるようになると、“留まる、滞在、迷って行動に移れない、躊躇する”などの方向にも展開してゆく。動詞「ヤスラフ」はこの展開方向にウエイトのある動詞であり、「タメラウ」の言葉の出現により死語化していったとの説明にも納得がゆく。

「休息する」から「躊躇する」までの意味は「安」の三分類法にはない特徴であり、これを分類Y（「やすむ（休息、休憩、横臥、就寝）、病の平癒（Y-1）」「止まる、とどまる（息災、休止、滞在）（Y-2）」）と分類Z「迷って行動に移れない、躊躇」に整理すると、「ヤスム」は「A + Y」となり、当てはまる漢字は「休・息」、これに対して「ヤスラフ」は「Y + Z」であり、当てる漢字は「休」である。分類Yはさらに「Y-1」と「Y-2」に分けることができ、「Y-1」は「Y-2」と比べると、分類Aとかなり近く、重なる意味合いも多くなる。

分類「A + B + C + Y + Z」は動詞「ヤスム」系と「ヤスンズル」系の動作結果の特徴を全てまとめた形となる。これほど多様な特徴を持つ「ヤス〜」と呼ばれる語彙に共通する要素とは何であろうか。該当の唯一の言葉を見つけることは今のところできないが、医学分野ではよく似た諸現象を副交感神経優位型の心身状態として捉えている。

副交感神経はそれと拮抗的に作用する交感神経と対の関係で、内臓や神経系などを最適状態に維持するために働く自律神経である。交感神経と副交感神経は「アクセルとブレーキ」あるいは「活動モードと休息（リラックス）モード」ともたとえられるように、反対の力を有してお

り、両者がバランスよく働くことで、微妙な調節から昼夜転換のたぐいの大きな調節までを担当し、人体の健全な活動を支えている。

大型調節についていえば、昼間は交感神経優位型の心身状態で活発で敏速な活動に適する状態を維持するが、夜になると副交感神経優位型心身状態（休息モード）に切り替わることで、昼間の心身の疲れを癒し、活動を止めて眠っている間に昼間の活動で消耗したものを補い、汚れを落とし、傷ついた場合には修復する等々、次の活動のための蓄えや備えをする。したがって、大型調節においては交感神経と副交感神経の交代がリズムカルに（規則正しく）行われることで、健康を維持しやすくなると考えられている。このような自律神経系の交感神経と副交感神経の相互転換現象はメカニズムなど分からない時代であっても、自身の体調であり、かなり多くの人が捉えてきた感覚とその変化、状態ともいえるだろう。とくに副交感神経優位型の心身状態に切り替わる過程とその結果状態状況を日本語は「ヤス〜」という言葉で表現していた、あるいは捉えていたと考えることができるのではないだろうか。これらを図示したのが図1である。

この自律神経系の仕組みに似たモデルを仮定すると、これまでの検討では正面切って説明することのできなかつた「無事」の解釈にも一つの解がみえてくる。第一報^[24]のときから「安全」の意味内容に近い解説の言葉として「無事」には関心を抱いていたが、現代日本社会では「取り立てて言うほどの変わったことが無いこと」の意味で用いる。しかし安全問題領域で言い直せば、取り立てて騒ぐほどの厄介な事、危険な事はなかったという意味であり、言い換えると、日常的に些細な問題なら幾らでも起きているともいえる。だからこそ、「取り立てて言うほどの変わったことが無いこと」が重要な関心事にも

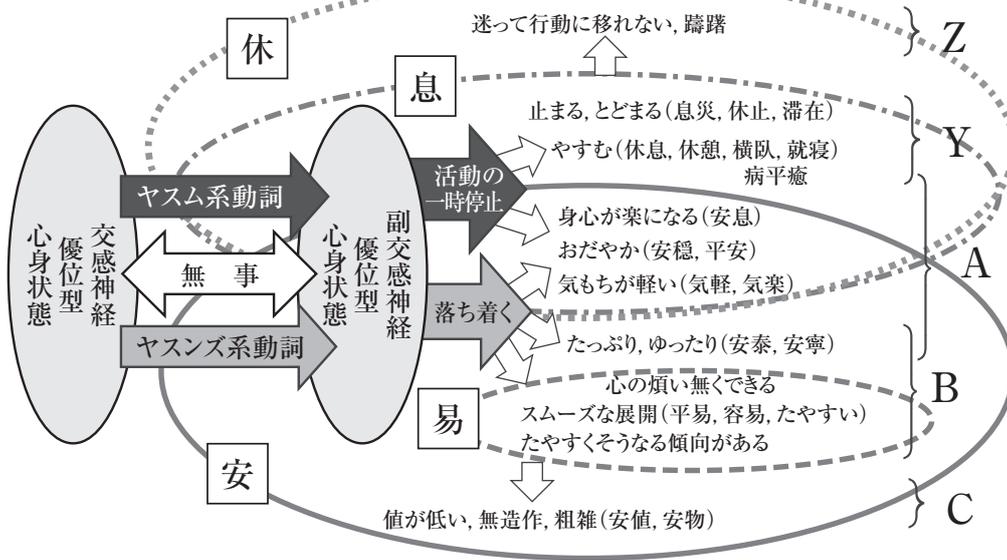
なるわけである。つまり結果に関心があるにもかかわらず、表現はその過程に“問題というべき問題は起きていない、あるいは起きないことに関心のある言葉”と位置付けることができる。

そして動詞「ヤスム」系と「ヤスンズ」系とは明らかに交感神経優位型心身状態から副交感神経優位型心身状態への切り替えに係る動詞である。しかし自律神経系のこの転換はバランスよく切り替わることで、最適な状態を維持できる仕組みになっており、副交感神経優位型心理状態から交感神経優位型心理状態に転換する矢印方向も劣らず重要である。このことを考慮すると「無事」はどちらの切り替えにおいても「取り立てて言うほどの変わったことが無い」ことが大事になろう。そこで「無事」は動詞と同じ場所に位置付け、両方向の切り換えにおける無事を問題にする形で図1では位置づけている。

3.2 「全」にあてる和語の検討

現代では漢字「全」の和訓に「マタ・イ（文語マタシ）」「スベテ」を挙げることが多い。しかし古語辞典類では「スベテ」に「凡、都、統、総（綜）」のいずれかをあてることも多く、複数挙している場合に「全」を挙げるものがある程度である。音訓索引でも「すべて」に「全」を入れる辞書もあるが、入れない辞書もある。コアイメージ^[9]でいえば、「凡：広く（満遍なく）覆う」「都：多くのものが集まる」「統：全体を引き出して一つにする」「総：一所にまとめて通す」である。簡単にまとめれば“たばねくくる。ばらばらのものをまとめる”であり、本論ではまずは「マタシ」を中心に「全」を当て見出し語とその解説をとりまとめ、次に「スベテ」を取り扱う。

時代別国語大辞典上代編は表7に、同室町時代編は表8にまとめている。日本国語大辞典については時代別国語大辞典との比較の観点から、



Z			ヤスラフ	迷って行動に移れない, 躊躇			
Y			ヤスム	止まる, 止まる (息災, 休止, 滞在) やすむ (休息, 休憩, 横臥, 就寝)	病平癒		休
A	ヤスイ	ヤスラカ		心身が楽になる (安息) おだやか (安穩, 平安) 気もちが軽い			息
B				たっぶり, ゆったり (安泰, 安寧)		安	
				心の煩い無くできる スムーズな展開 (平易, 容易, たやすい) たやすくそうなる傾向がある			易
C				値が低い, 無造作, 粗雑 (安値, 安物)			

図表1 和語の語幹「ヤス」と関連語の関係

「マタ・イ (文語マタ・シ) 形ク」「マツトウ・スル 他サ変」「スベテ」を表9にまとめている。ちなみに表9に掲載しなかった語彙は「マツタイ【全】文語マツタシ 形ク (マタシの促音化)」「マツタキ【全】(文語形容詞「マツタシ」の連体形から)」「マツタク【全】副詞 (形容詞「マツタイ」連用形から)」「マツタク・スル【全-】連語 (形容詞「マツタイ」の連用形に「スル」が付いたもの)」「マツタシ【全】⇒マツタイ

(全)」「マツトウ マツタウ【全】(形容詞「マツタイ」の連用形から変化したもの)」であり、方言も取り上げていない。

3.2.1 「マタシ, マタイ」

表7~9で目に付く共通の特徴は和語に当てる漢字「全」と「完」の区別のない点である。上代編の解説には無いが、室町時代編には節用集の記載もあり、「完 (マツタシ)・全 (マツタシ)」と読ませる。その一方で、上代編の見出し語に

は【全・完】と二つの漢字を当てるが、室町時代編と日本国語大辞典の見出し語では【全】で統一している。しかしその解説では「完全」「完璧」を多用し、「完」のイメージが払拭されているわけではない。

つまり漢字「全」と「完」とは歴史的に区別してこなかったように見える。また「安全」との関係でいえば、上代編では「マタシ【全・完】：完全である。安全で無事である。毀損されずにある。」と大づかみな解説をしており、あたかも「マタシ【全・完】＝「完全」＝「安全・無事」＝「毀損されていない状態」を示唆するように見える解説となっている。

これに対して室町時代編の「マタ・シ【全し】」の解説主旨は同じに見えるものの、「安全」の言葉は使わない。編者は見出し語の漢字から「完」を外す、あるいは「全」の採用を決定したわけであり、「完」と「全」と「安全」も区別しているように見える。少なくとも無意識とは思えない。

漢字「全」のコアイメージは「欠け目なくそろろう」であり、漢字「全」と「完」もその字源に遡れば十分に識別可能である。「全」の字の設計意図の特徴から言えば、象嵌などの工作の際、びっしりと玉をはめ込む場面を設定した図形であり^[9]、空間的に欠け目のないことを象徴する。これに対して「完」のコアイメージは「丸く行き渡る」であり、家の周囲に垣をめぐらす場面を設定した図形である^[9]。学研漢和辞典^[10]では「丸く取り囲んで欠け目なく守るさまを示す」ともある。「丸く行き渡る」ということは、取り囲む手段が壁であれ、溝であれ、縄であれ、円を描くように巡らして再び出発点にまで戻ってきてはじめて欠陥のない円を描けるわけであり、その内側のものごとを守ることにつながる。欠け目なく取り囲むことで守る準備ができたことになろう。これは動的な捉え方であり、時間経

過を含む捉え方である。「全」の場合は象嵌のイメージにそっていえば、縁取りしたその内側全体に象牙がびっしり、欠けたところの無い状態で嵌め込まれていることを問題にする。これは静的なとらえ方といえよう。そういう事情もあるせいで、「完」は終わりの意味でも使われる。現代の我々も、映画などの最後に「終」もあるが、「完」の字幕も使われる。もしも字幕が「全」であったなら収まりがつかない感覚を覚えるだろう。そうした違いがあるからであり、この点が「全」と「完」の違いの特徴といえる。

ちなみにメドハースト『華英字典』(1842)^[17]でも「全」の見出し語における「完全」の英語解説は「to finish」であり、「完」の見出し語における「完全」の英語解説は「completed」である。なお「安全」の事例がないため「完全」と「安全」を区別していたのかは不明であり、区別が無いようにも見える。

また日葡辞書は、その発行年代から見ても、室町時代編とその見出し語や解説(表8)はよく似ているのだが、動詞「まっとうす」の見出し語は無い。

参考までに日本国語大辞典の「マツタイ」(文語マツタシ 形容詞「マタシ」の変化したもの)の見出し語には同訓異字として「完」と「全」の解説も付く。「全(ゼン)：すべてがそろっている。あますところなくととのっている。全知全能・全人・万全」「完(カン)：あるものごとに欠けた所がない。欠損や欠落がない。すべてがそなわっている。完全・完備・完璧・補完」であり、明快に両者を区別できる説明とはいいたい。

漢字「全」と「完」に違いがあることは確かであるが、和語「マタイ、マタシ」の観点からいえば、解説に出てくる「完全」の言葉に象徴されるように、「完」と「全」の両方を含意する内容、意味の強化が図られた内容、ということ

になろう。

「マタイ、マタシ」の解説についてであるが、関連語の解説は「完璧」の故事を想起させるのが特徴といえるほどである。史記の廉頗・藺相如列伝によれば^[18]、璧は輪の形の平らな宝玉を指し、中国の戦国時代、BC279の頃、大国の秦の昭襄王から弱小国の趙の恵文王に対して「和氏の璧」と呼ばれる名玉と十五の城（城郭で囲まれた町）を交換しようという強い申し出があった。大国の秦に「和氏の璧」をだまし取られる可能性が高く困っていたが、食客の藺相如^{りんしょうじょ}がその任務を引き受けて秦に使者として出向く。心配していた通り、交換条件の城が手に入らないことを藺相如が知ると、命がけて「璧」を守り趙の国へ無事に持ち帰った。正確に言えば、藺相如はだまされ盗られたことを確信するやいなや怒髪天を衝く気迫で昭襄王から「和氏の璧」を取り戻し、自らはその地に留まり、その間に家来に速やかにこの名玉を趙国に持ち帰らせたのである。結果的に彼も無事帰国するが、それは昭襄王の計らいによるものであり、藺相如にとっては九死に一生を得る強運であった。そうした命がけの策略を実行し、生還した藺相如は大出世を遂げ、「刎頸の友」の故事成句にもつながる。これが「璧を完^{へき}うして帰^{まっ}る（完璧帰趙）」の故事である。

日本では四字熟語ではなく、前半の「完璧」のみ利用したこととも関係するのだろうが、「完璧」をやがて「完全な璧（玉）」と解釈していく。故事来歴からいえば「物をもとのまま、少しも壊すことなく持ち主に返すこと」であり、「元の状態」と無関係に絶対的な意味での「完全な玉」を指すわけではなく、“玉を完きものとする”^(論者注4)という“動詞+目的語”構造の意味であり、“動詞～+名詞○”の構造の熟語を一般に日本人は“○を～する”ではなく、“～な○”ととりがちですので注意しましょう。^[18]との指

摘もある。言い換えると、“まったく欠点の無い名玉”の意味にずれてしまうのは日本的解釈の特徴といえるのだろう。

「完璧」を「完全な璧」と考える場合でも、故事来歴を意識するなら、そして社会安全学の立場であれば、論理的には「欠けの無いもの」は二つ想定できる。一つは「和氏の璧」であり、いま一つは使者の藺相如の身についてである。表9「マッタシ（全し）」の解説を見ると、この二つの「欠けの無いこと」にそって整理すれば、①は“事物・事態の不足が無い、又は欠点や傷がなく完全である”であるから「和氏の璧」に該当し、抽象的にいえば非生命系のものの無事を意味し、②は“生命・肉体が損なわれず完全である。無事である”であるから生命系の意、藺相如の無事な帰趙に該当し、もっと抽象的にいえば、その策の関係者の無事の意味、と区別することは合理的整理であろう。そしてこの整理法は室町時代編の「マタシ【全】」「マッタシ」の解説にも合致する。

これに対して上代編（表7）では「完全である。安全で無事である。毀損されずにある」と簡単に解説するために判断し難いが、突然「安全」の言葉がでてくるのは理解しにくいものの、完璧の故事の藺相如がイメージされているとすれば、現代的解釈としてならば納得がいく。実際に広辞苑（7版）の「マタ・イ」の解説は日本国語大辞典と基本的に同じといってもよいが、表現が簡潔な分、わかりやすい（「マタ・イ（形）文語マタシ（ク）」① 欠けたところがない。ととのっている。まったし。（万葉）② 安全である。無事だ。（十訓抄）③ 律儀である。正直である。（目近籠骨）④ 従順である。おとなしい。（仮、犬枕）⑤ 愚直である。おろかである。）、少なくとも①②は上代編の解説と違わない。

動詞サ変「マツウス【全ス】」は「マツクウスル」の転であり、室町時代編の解説は完璧の

表7 時代別国語大辞典：上代編の「全」関連の和語

見出し語	品詞等	解説	備考
マタシ (全・完)	形ク	完全である。安全で無事である。 毀損されずにある。	文献：記景行、万葉、三一詔、記垂仁、神代紀上、諷誦文稿、西大寺本金光明最勝王経古点（830頃）、石山寺本法華経玄賛淳祐古点、「牢・完（マタシ）」名義抄
マソシ (雅)	形ク	正しい・確かであるの意か。 文献：景行紀十七年、華嚴音義私記	日本書記「命マソケむ」は古事記「命マタケむ」の転という説に疑問を呈している。「命マソケむ人」は健やかに命ながらえている人の意であるが、そのマソシの意味はこれだけからは明らかでない。
スベテ 【凡・都】	副詞	あわせて、残らず、皆。動詞スベの連用形に「テ」が付いて副詞化したもの	神代記上、欽明紀四年、天武記元年、遊仙窟、名義抄

表8 時代別国語大辞典：室町時代編の「全」関連の和語

見出し語	品詞等	解説	備考
マタシ (全し)	形ク	① そのものとして望ましい完璧な状態を保つさまである。特に、危害を加えられることなく、最後まで無事な状態であるさまである。 ② 実直な人柄・性格である。（日葡「マタシ」：率直、素直で実直な）但し文献[19]では「率直単純で実直な」	① 広本節用「完（マタシ）・全（マタシ）」 ② 易林節用「完（マタシ）：正直也」
マッタシ (全し)	形ク (マタシの強調形)	① そのものとしてあるべき姿・内容をすべて具えていて、いささかも欠けたり損ねられたりしたところのないさまである。日葡「マツタイ：完全な、疵のない（もの）」 ② いささかも危害を加えられることなく、最後まで無事にいられるさまである。（日葡「マツタイ」マツタイ所：安全な場所）	和漢通用「全（マッタシ）：欠けぬ也・完（マッタシ）：同義」
マツタク (全) 「マツタウ」 とも	副詞 マッタシの連用形から	① そのものとして完璧で、いささかも欠けるところのないさま。日葡（「マツタク」疑いなく、すなわち、まったく、かつ完全に）* ② 打消の言い方と呼応して、全面的に否定する意を表す。	*[19]では「マツタク」確かに疑いもなく、または、すべて、完全に」
マツトウス (全す)	動サ変	その人に与えられたりゆだねられたりしたものを、最後まで損ねることなく完全に保つ	漢書列伝竺桃抄、太平記 8、天草平家
スベテ (総)	副詞	① 関係するものを、もれなくまとめて取り上げるさま。 ② 個々の事柄の大同に着目して、物事を総括的にとらえていうさま。 ③ 打消の語を伴って、事態を全面的に否定するさまを強調して表す。 [19]では「スベテ (総て) 総体で、あるいは、全部まとめて、または一般的に」 (日葡)「スベテ：要するに、とか、全部を合せて、とか、一般に、とか」	雑筆略注、太平記 34 太平記 9、短編小式部 雑筆集、応永本論語抄、太平記 34

故事解説そのままといってもよく、日本国語大辞典の解説も、それをやや抽象化した程度の違いにとどまる。ちなみに広辞苑（7版）でも「(あてがわれた物事などを) 完全にはたす。見

事になしとげる。また完全に保つ。」と解説し、「任務を全うする」の用例をだしている。

3.2.2 「スベテ」

「スベテ」の語は「スベ【統】、スベル【統】

表9 日本国語大辞典「マタイ」「マツウスル」「スベテ」

解説	用例
またい【全】 文語：またし【形ク】	
① 事物・事態が不足なく、または、欠点やきずがなく完全である。全部が整っている。完全である。完璧である。不都合のない。まったいい。	東大寺諷誦文平安初期点（830年ごろ）、石山寺本法華経玄賛平安中期点（950頃）、源氏（1001-14）東屋、大日経義釈延久承保点（1074）、高野本平家（13C前）
② 生命・肉体が損なわれず完全である。無事である。別条がない。まったいい。	古事記（712）、西大寺本金光明最勝王経平安初期点（830頃）、高野本平家（13C前）
③ 人の性格が正直である。律義である。誠実である。まったいい。	百丈清規抄（1462）、本福寺跡書（1560頃）、虎明本狂言・目近龍骨（室町末-近世初）、仮名草子・犬枕（1606頃）
④ おとなしい。柔和である。	京大國文研究室本周易抄（1477）、洒落本・浪花色八卦（1757）
⑤ 馬鹿げている。愚鈍である。	咄本・昨日は今日の物語（1614-24頃）上、咄本・当世はなしの本（1684-86）、雑俳・馬たらひ（1700）
まっとう-する【全】 文語マツクフ-【他サ変】（マツクスルが変化して一語化したもの）	
欠けることなく完全に。完全に果たす。また、欠点なく完璧に保つ。	屋代本平家（13C前）、太平記（14C後）、虞美人草（1907夏目漱石）
すべて【総、惣、渾、凡、都、全】（動詞「すべる（統）の連用形に助詞「て」の付いてできた形	
I. 多くの事物、事象を統括してひとまとめにしていう語。漢文の訓読から出た語。	
① 全部とりまとめて。万事何もかも。残らずみんな。ことごとく。	日本書紀（720）、古今集（905-14）、枕草子（10C終）、源氏物語（1001-14）、大唐西域記（1163）、色葉字類抄（1178-81）、歌舞伎・幼稚子敵討（1753）、安愚楽鍋（1871-72）、自然と人生（1900）〔徳富蘆花〕
② 一般的に。総じて。おしなべて。だいたい。いちめん。	蜻蛉日記（974頃）、宇津保物語（970-999頃）、落窪物語（10C後）、源氏物語（1001-14頃）、堤中納言（11C中-13C頃）、伊曾保物語（1639頃）
③ （下に打消しの語を伴って）全く。いっさい。決して。少しも。	大和（947-57頃）、石山寺本法華経玄賛平安中期点（950頃）、宇津保物語（970-999頃）、源氏物語（1001-14頃）、狭衣物語（1069-77）、平家物語（13C）、方丈記（1212）、梵舜本沙石集（1283）
II. (名)	
物の全部。また、事柄の顛末のいっさい。	滑・浮世床（1813-23）、吾輩は猫である（1905-06）〔夏目漱石〕、金（1926）〔宮崎資天〕、測量船（1930）〔三好達治〕

の連用形に助詞「テ」を付けた形」に関しては調べた範囲の古語辞典や日本語大辞典では皆同じである。しかしこの「スベテ」に当てる漢字として「全」を挙げるのは日本国語大辞典と角川古語大辞典であり、前者は【総・惣・渾・凡・都・全】、後者は【総・惣・全】である。参考までに言い添えれば、時代別国語大辞典の上代編は【凡・都】、室町時代編は【総】、岩波古語辞典は【凡て】、小学館古語大辞典は【統・総・凡】である。しかしその意味についてはそれほ

どバラつきのある解説がなされているわけではない。

4. 言葉「安全」の歴史的变化と日本的課題

4.1 初出の時期

第一報^[24]の「4.4 古典文学作品にみる「安全」の用法」において日本古典文学摘集の原文と現代語文の違いについて取り上げたが、もう少し作品数の多いものに新編日本古典文学全集のデジタル版（ジャパン・ナレッジ）^[22]がある。

記紀・萬葉などの古代文学から、源氏物語などの中古文学、平家物語などの中世文学、そして近松・西鶴などの近世文学まで263作品、総数43,000ページに及ぶ^(注3)。これを利用して「安全」で検索したところ、原文でのヒット17作品30箇所(表10)、現代語訳文でのヒット29作

品であった。

表10から見えてくるのは、熟語「安全」の初出に近いものとして、13世紀前半の平家物語を指摘することができそうなことである。しかも「安全」の語彙は初期には軍記もので多用されており、しかも江戸時代に入る頃までは「天下安

表10 新編 日本古典文学全集(小学館)の検索結果

	文献	原文における「安全」の用法
1	平家物語(13C前)巻三 医師問答	入道の悪心を和げて、天下の安全を得しめ給え
2	〃 卷七 山門返牒	海 ^{とこしなえ} 鎮に其安全をえず。
3	宇治拾遺集 卷七 五色の鹿の事	その後より天下安全に、国土ゆたかなりけりとぞ。
4	太平記(14C後) p263	西海の安全を定め給えとなり。
5	〃 p328	安全宝塔の上にて、
6	〃 p329	安全宝塔の上より下りて
7	〃 p363	安全を四明の懇府に任ずる
8	〃 p143	早く経綸安全の今の靈験を
9	〃 p145	殊に百王の安全を得しめんがため
10	謡曲集(南北朝～室町時代末期) p62	天下安全に守り給ふ
11	〃 p125	都鄙安全になすべしとの、仰せによって
12	〃 p234	国土安全を守り給ふ
13	〃 p270	風も収まり、雲静かに、安全をなすとかや
14	〃 p173	国土安全長久の
15	俳諧集(江戸時代) p508	四海安全に国治まり、
16	仮名草子集(一休ばなし) p290	往生安全にとげ給へ
17	世間胸算用(井原西鶴集) p358	神前長久民安全、御祈念のため
18	〃 p414	出雲の大社に集り給ひて、民安全の相談あそばし
19	連句編(松尾芭蕉集) p454	信仰の意味ではなく、航行安全のため、灯台の代わり
20	出世景清(近松門左衛門集) p18	四海泰平安全と、祝ひこめたる墨壺の糸の直くなる。
21	国性爺合戦(近松門左衛門集) p348	永暦皇帝御代万歳、国安全と寿くも大日本の君が代も
22	平家女護島(近松門左衛門集) p531	有王丸、ハアア、お命安全めでたし、
23	〃 p537	御所の震動安全たり(注は“しずまった”と解説)
24	〃 p549	天下大平、国繁昌、五穀成就、民安全、めでたい…
25	妹背山婦女庭訓 8 浄瑠璃集) p360	五本の柱は五畿内安全、八重九重の内までも治り、
26	英草紙(江戸中期 1749年) P114	左ある時は、其の身も安全なるべしと。
27	川柳(江戸中期頃) P445	よちよち歩きの子を安全な所に置き
28	近世説美少年録(1829～32) P471	呵責の咎を免れて、安全として日を送りけり。
29	日本漢詩集(飛鳥～江戸) P27	実は草壁皇子の地位の安全を願う草壁皇子の母連
30	風姿花伝(能楽論集) P209	秦の河勝つに仰せて、かつは天下安全のため、かつ

全」「西国安全（原文は西海安全）」「国土安全」変わったところでは「都鄙安全」、また治国済民を意味する「経綸安全」といった使われ方が目に付く。また個人を指す場合も天皇である場合に限られている点である。江戸時代に入ってもそうした傾向は残るものの、しかし「民安全」が出てきたり、天皇やそれに準ずる人以外の「身の安全」、や「往生安全」「航行安全」のような表現もでてくる。

振り返ってみれば、江戸時代の中期頃を境にそれ以前と以後とでは社会の秩序の様子は大きく変化しており、とりわけ「安全」とその関連語はそうした時代的影響を大きく受けているようにみえる。

4.2 言葉「安全」再考…日本人の受け止め方の特徴と課題

日本語は文字をもたずに一定段階まで発達した言語であり、文字の導入により、漢字文化の直輸入の面と翻訳の面の両面の特徴をもちながら洗練されてきた言語体系である。第一報の冒頭では原子力発電所の最悪の事態の想定とその対処策に関する欧米社会との違いを指摘したが、言葉は文化の一形態とも言われるように、一朝一夕に変化できるものではない。文法や教授法を工夫して学ぶ外国語習得と異なり、母国語は理屈抜きで体にしみこむ形で修得してきた言語であり、その修訂正は容易ではない。しかし歴史を振り返ってみれば、新しい時代を切り拓いてきた社会では伝統を超える新しい発想と姿勢を生みだし、育て、共有してゆくことで、成功に導いている。日本語はある意味では複雑な言語事情を抱えているが、表意文字の漢字、平仮名と片仮名という表音文字を十分に活かすことで、その複雑さは逆に飛躍・発展のバネとなって豊かな言語世界を築ける可能性を秘めている。しかし“彼を知り己を知れば百戦殆から

ず”であり、そのためには日本語の特徴を深く知るところから始める必要もあると考えている。とくに、弱点を自覚することはその克服の第一歩となる。そこで本論では最後のまとめの一つの形として、和語の検討過程で気づいた課題をとりあげる。

4.2.1 「安危」と「危険のないこと」の関係

日本国語大辞典には字音語素「安」以外に「アン【安】名詞」の見出し語の記載もあり「① やすらかなこと。危険のないこと。困難がないこと。（史記抄 1477, 春秋左伝…襄公 11 年 BC572 年-542 年）、② やすめること。しずめること。落ち着けること。（禅海一瀾 1862「13」）③（形動）手軽なこと。値段がやすいさま。（滑稽本・胡瓜遣〈仮名垣魯文〉1872）④「案」に同じ。⑤「庵」におなじ。」と解説する。また室町時代編では「アン【安】：(1) 危険がなく、平安・無事であること。（史記抄 1477）(2) 安息。休息（信長記 1622）」と解説する。

この形は漢和辞典における見出しの作り方でもあるが、挙げる著作は日本人によるものであるから、日本人が漢字「安」をどのように受け止めているかを知る手がかりともいえる。ただし漢字「安」一字の用法事例は少なく、一般論を引き出すことは難しい。しかしその過程で遭遇した解釈には疑問があるので、その点を取りあげるものである。

史記抄は桃源瑞仙、当時の口語調（講義調）仮名体で史記を解説したものであり、史記原文は「安危之機 豈不以謀哉？」である。この文脈での「安危之機」は「安危の分岐点」の意味であり、現代の多くの辞書は「安危」を「安全と危険」の二字熟語に転換して解釈を進める。しかし「安危」は明らかに「全」や「險」を問題にしていない言葉であり、漢字「安」と「危」の概念的特徴から考察するのが基本ではないだろうか。コアイメージは「安：（上から下に押さ

えて)じっと落ち着ける」と「危:バランスを欠いて傾く」であり、その限りでは安定と不安定の観点からの対比である。「不安定さ」は危険とみなすべき現象の一つであることは確かであるが、この事例をもって「① やすらかなこと、危険のないこと、困難がないこと。」「(1) 危険がなく、平安・無事であること」と解説するのは妥当だろうか。

「ヤス」の特徴を記した図1の「安」三分類でいえば、「やすらか」と「困難がない」は分類AとBに該当する。しかし「危険のないこと」はどこから出てくるのだろうか。時間経過を加味した結果としての表現、一般的に言えば「危険が去って、平安・無事である」であれば十分に納得がいく。室町時代編の「(1) 危険がなく、平穩・無事であること」は微妙な表現で、誤解を生みかねない表現でもあるが、わからなくはない。しかし日本国語大辞典の「① やすらかなこと、危険のないこと、困難がないこと。」の表現になると、結果状態情況のみを語るにもかかわらず、「危険のないこと」を加えては、次に「安全であれば、危険がない」「危険であれば、安全ではない」との発想に流れるのは時間の問題であり、そこまですれた表現になれば、明らかに間違っているといえる。なぜなら結果が出た直後であれば、まさに「危険がなくなって、平安・無事であること」との表現は適切であるが、入手した結果状態がこの先も「危険がない状態」を維持するかどうかは別の問題と考えざるを得ないからである。それは二番目の文献からも言いうる主張である。

二番目の文献は春秋左伝「書曰、居安思危、思則有備、有備無患」(安きに居りて危うきを思う。思えば即ち備え有り。備え有れば患い無し)である。日本では「有備無患(そなえあればうれいなし)」のみ有名であるが、「居安思危、思則有備」は「安と危」に関する日本的発想とは

異なる関係を示してもいる。心落ち着いている安らかな状況、状態にあっても、否、安らかな状態だからこそ、この先の危い事柄についてよくよく考えてしかるべく備えておくことの重要を論ず、あるいは警告する句である。つまり、いま「安」であることは「危について一切考えなくてもよい」とは言えないとの指摘である。

日本国語大辞典の「アン【安】名詞」の解釈「② やすめること、しずめること、落ち着けること。」は漢字「安」の概念的特徴から言えば当然の解釈である。『禅海一瀾』^[17]は今北洪川(1816-1892)の漢文著作で、「自得之術、在止定静安慮五者」を挙げる。「止定静安慮」は古典『大学』の明德の解説に出てくる箇所であり、原文「知止而后有定、定而后能静、静而后能安、安而后能慮、慮而后能得」を短縮した表現である。訳注者太田悌蔵は「止まるを知りて後能く定まる。定まりて後能く静か。静かにして後能く安んず。安じて後能く慮る。慮りて後能く得。」とする。ここでも「安んじて後、よく慮る」と解説しているのであり、「危」との対比ではないが、深く広く物事を考える際には心身が安らかであることの大事さを指摘している。先の指摘と同じく、先々の事柄について深く広く考えるには心身が安らかなことが大事だとも指摘しているのである。

将来一切の危険が無いと確約されたら安心することは間違いないが、しかしそれはあまりにも非現実的ではないだろうか。厳密に言えば、将来結果はなってみなければわからないことでもあるからである。つまり確実な予言などできないという意味では不確実であり、不安定とは厳密には異なる。「危険」について論ずるには相応の根拠も必要であり、別論として扱うので、本論では時間的要素の配慮無しに「安全であれば危険ではない」という論述は大きな誤解を生み、人々を混乱に陥れる原因の表現である点を

指摘するにとどめる。

4.2.2 「安心」と「用心」と「時間感覚」

この一つの典型的な事例に「secure, security」がある。「security」はラテン語 *secūritās, secūrus* に遡り、言葉の構造的特徴は「*sē-*(= without) + *cūra* (= care)」である。つまり心配の要らない状態を指す。日本人の多くは、心配いらないと告げられたら、素直に緊張を解除して、好きなことを思い切りするように動くかもしれない。期待する内容であれば手放しで安心する人が多いともいわれる。

しかし「security」が母国語の人々は、おそらくもっとずっと苦い経験をしてきているせいであろうが、手放しに「心配の要らない状態」が実現するとは受け取らない。そのために「security」の内容を本当に実現させるためには、いかなる工夫があるかを考えたり、そのために動いたりする。用心深いともいえるかもしれない。そういう発想で言葉を用いるので、安全保障、保証、担保、確実、心丈夫、確信、安心などの訳がでてくるような使い方をする。有価証券の訳にもなっていく。警備会社は security company である。

楽天的と用心深さを性格の違いで片付けやすいが、危険に対する姿勢の違いではないだろうか。つまり時間経過を軽視した姿勢とその特徴を捉えることができる。いま目の前の現実だけではなく、もっと先の先まで、現代のように高度な科学技術を駆使して成立している社会では、先に先にと配慮し続ける努力なしに高度文明を享受できる社会など構築も維持もできないのである。その時「安らかで危険のないこと」という発想はどれほど役に立つだろうか？

日本的思考法の特徴の一つは、時間に関する配慮が弱い、つまり時間を考慮に入れることがそもそも下手なのではないだろうか。時間に弱いということは、一度決めたら、変えにくいと

いうことでもあり、時間の経過とともに条件が変化してもそれに適応できないことを意味する。“危険が去って、ホット安心する”ことはあるだろう。しかしその一時期が延々と続くと考えるのは現実的ではない。

生物は時間枠の中で生きており、生物にとって「時間が経つ」とは「変化する」の別表現でもある。仮に、周辺条件の変化が全く無い場合でも、主体自身の状態は時々刻々変化する。幼い時期には成長し、成熟期を過ぎてからは衰退していくのであり、生物にとってこの変化は意思的に制御できないものであり、宿命とも表現される。しかしだからこそ「特定の状態状況の維持」のためには変化に応じた適切な行動（動作）が不可避ともいえるのである。自律神経のモデルで言い直せば、交感神経と副交感神経が適切に転換できてこそ、厳しい生存条件下を健康で健全に生き抜くことができるのであり、どちらかにだけ長く止まることは不健康であり、不安全行動ということになる。

5. 結語

漢語「安全」の音読みそのまま使われている日本語「安全」は、翻訳の宿命を色濃く残していることが今回の和語からの検討で明らかになった。欧米社会と比較して、楽観的な受け止め方をしているのは、当初は運よく戦争体験を70年以上も回避できていた幸運のせいとも思っていたが、「ヤスム系動詞」と「ヤスンズル系動詞」が重なる形で受け止められていたことが一つの原因である可能性が今回浮かび上がってきた。

「ヤスム系動詞」は活動を止めて休むのであり、「息」は生命の気を吸い込む行為であり、「いきをすること」は元気を回復することを意味する。休憩は横臥しての睡眠にも移行しやすく、元気を回復するということが病人なら病の治癒にもつながるだろう。しかしそこに「ヤスンズ

ル系動詞」が重なる。この単語はもともとは国の統治者としての天皇の枕詞であり、それが時代の流れの中で、支配者層の言葉として広がるものの、そのレベルに留まり、結果的に今日まで支配者側の言葉として伝えられてきたのではないだろうか。日本の歴史には事件レベルはあっても、革命ということになるのが、庶民が主権を勝ち取る動きに成功した歴史がない。大陸の社会の歴史とは異なり、周囲を海に囲まれるという自然の城壁のお蔭で、大陸社会が経験してきたような手ひどい敗戦を繰り返し経験する目には会わずに過ごすことができ、千年以上も昔のままの感覚が続いたということなのであろう。そうであるとすれば、多くの日本人が受身の形でしか「安全」の言葉を受け止めず、時間的感覚が弱いのも、自然な流れだったといえるのかもしれない。

しかし現代社会は大きく事情を異にすることになった。指導者層や支配者層だけが安全問題に深刻に取り組み、出された指示にだけ従っていれば、問題が解決していく状況下では無くなっている。高度科学技術文明を享受している社会である以上、その恩恵を受けている人々全員が心を併せて対処しなければ、遠からずして無秩序な混乱の世界が訪れることになると、様々なデータは警告している。人口、気候変動などの結果として、不足する食べ物や水、土地を巡って激しい争いになっても不思議ではないからである。

交感神経と副交感神経の関係は、そのリズムカルな交代にこそ健康の秘訣があるのだとすれば、能動的に活動する立場や時期と英気を養い元気を回復させる立場や時期とを意識することが大切ではないのだろうか。「安全」の和訓を「ヤスク マッタシ」から「ゼンヲヤスンブル」に転換することも選択肢の一つにならないだろうか。すべての物事をヤスラカにさせる配慮や

行動とは何であろうか。そして能動的に配慮する立場や時期、受け身に対処して英気を養う立場や時期とをバランスよく切り換える発想こそ、これからは目指すべき姿勢であるのかもしれない。まずは、日本語の特異性を見極め、その短所を自覚するところから始めるのが一番自然な回復につながるように思われる。

注

1. 玉匣 覆乎安美 開而行者 君名者雖有 吾名之惜裳
(玉ぐしげ 覆ふをやすみ 明けていなば 君が名はあれど 我が名し惜しも)
小竹之上尔 来居而鳴鳥 目乎安見 人妻妬尔 吾恋二来
(篠の上しのに来居て鳴く鳥目を安み人妻ゆえあれに我恋ひにけり)
2. なお「ヤスミス」は広辞苑(2018)にも記載のある言葉であり、文献も同じだが、自動詞サ変「たいらかに天下をお治めになる」と解説する。
3. 検索対象作品リストは次の通りである：古事記(712)、日本書紀(720)、風土記(奈良～平安)、万葉集(759年以降の成立)、日本霊異記(822頃)、古今和歌集(913年頃成立)、竹取物語(9世紀末頃)、伊勢物語(10世紀中頃)、大和物語(951頃)、平中物語(10世紀中頃成立)、土佐日記(935頃)、蜻蛉日記(974頃)、うつほ物語(969-1011頃)、落窪物語(10世紀末頃)、堤中納言物語(平安後期-鎌倉中期)、枕草子(1001頃)、和漢朗詠集(1017-21頃)、源氏物語(1001-10頃)、和泉式部日記(1009頃)、紫式部日記(1010頃)、更級日記(1060頃)、讃岐典侍日記(1109頃)、浜松中納言物語(1062頃)、夜の寝覚(1045-68頃)、狭衣物語(1077-81頃)、栄花物語(1092-1107頃)、大鏡(1086-1123頃)、今昔物語(1120以降成立)、住吉物語(平安～鎌倉中期)、取りかへ早7物語(平安末期)、松浦宮物語(鎌倉初期)、無名草子(1198-02頃)、将門記(940頃)、陸奥話記(1162頃)、保元物語(1219-22頃)、平治物語(鎌倉初期=中期)、神楽(平安)、催馬楽(平安初期)、梁塵秘抄(12世紀後半)、閑吟集(1518)、新古今和歌集(1205)、方丈記(1212)、徒然草(1330-31)、正法眼蔵随聞記(1235-38)、歎異抄(1288)、平

家物語（13世紀前半）

4. 原文は「[玉を全きものとする]という動詞+目的語構造の意味です。」とあるのだが、文意から考えて「玉を全きものとする」の誤植と考える。そのため論文中では訂正したものを掲載している。

引用・参考文献

- [1] 時代別国語大辞典（上代編），三省堂 1967
- [2] 時代別国語大辞典（室町時代編）三省堂 1985～2007
- [3] 小学館『日本国語大辞典』（初版 1972）（二版増補版 2000），『精選日本国語大辞典』（2006）
- [4] 上田萬年・松井簡治『大日本国語辞典』富山房 金港堂（1915）
- [5] 小学館 1994『小学館古語大辞典』（1994）
- [6] 角川書店 1999『古語大辞典』（1999）
- [7] 大野晋他編 2009『岩波古語辞典増補版』（2009 岩波書店）
- [8] 大野晋編 2012『古典基礎語辞典…日本語の成り立ちを知る…』（2012 角川学芸部）
- [9] 加納喜光『常用漢字イメージ辞典』中央公論新社（2011）
- [10] 藤堂明保・加納喜光編『学研新漢和大字典』学習研究社 2005
- [11] 白川静『字通』平凡社（1996）2010
- [12] 新村出『辞苑』（1935），『広辞苑』（初版 1955～7版 2018）
- [13] 今北洪川著太田悌蔵訳注『禅海一瀾』岩波書店（岩波文庫）
- [14] 金谷治訳注『大学・中庸』岩波文庫 1998
- [15] 宇野哲人全訳注『大学』講談社学術文庫 1983
- [16] 釈宗演『禅海一瀾講和』岩波文庫 2018
- [17] Chinese and English Dictionary, Batavia: Parapattan Vol.1 and 2 1842-1843（本文中では『華英字典』とも略す）
- [18] 中国語スクリプト故事成語「完璧」<http://chugokugo-script.net/koji/kanpeki.html>（2019年12月3日確認）
- [19] 土井・森田・長南編訳（1980），邦訳日葡辞書，岩波書店
- [20] 加藤知己・倉島節尚編著（2000）『幕末の日本語研究… W.H. メドハースト英和・和英語彙…複製と研究・索引』三省堂
- [21] <http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/waei/> 和英語林集成デジタルアーカイブス
- [22] 新編日本古典文学全集デジタル版（ジャパン・ナレッジ）
- [23] 戸川芳郎監修『全訳漢字海 第二版』三省堂（2006）
- [24] 辛島恵美子（2020），日本社会の「安全」の受け止め方の変化；外国人編集の日本語辞書の検討より，社会安全研究，vol.10, pp.115-148
- [25] 村上道夫（2016）明治時代以降の時点における「安全」と「安心」の語釈，日本リスク研究学会誌 26(3) pp.141-149

（原稿受付日：2019年12月9日）

（掲載決定日：2020年1月18日）

